

東北大学附属図書館報

木這子



BULLETIN OF
THE TOHOKU UNIVERSITY LIBRARY

URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>

—木這子（きばこ）とは東北地方の方言で、こけしのこと。小芥子這子（こけしぼうこ）—

目 次

○ I T化時代の図書館…………… 1	○ デジタイゼーション・イン・アメリカ：2003 年度海外調査報告 …………… 28
○ 連載 和算資料の電子化（3）： 和算常設展の開催…………… 4	○ 附属図書館の概況…………… 36
○ 一人5役の35年と図書館の思い出…………… 7	○ 人事異動…………… 38
○ 学術コミュニケーションの変革としての SPARC 活動…………… 9	○ 編集後記…………… 38
○ 平成15年度東北大学附属図書館企画展記念講演会 「明治三十三年の漱石、子規、晩翠」…………… 12	

I T化時代の図書館

医学分館長 佐 藤 洋



昨年12月に医学分館長を拝命しました。学生の頃から医学分館をはじめ留学先や各地の勤務先の図書館にはお世話になりました。医学部に戻ってからも、編集長をしていた Tohoku

Journal of Experimental Medicine（東北ジャーナル）の多くの部数を医学分館には買い上げていただき、さらに交換雑誌として世

界各国に送付していただいております。ずーっとお世話になりっぱなしと言っても過言ではありません。今後は多少でも恩返しができるばと考えております。

さて、図書館の中心的役割は図書の保存と必要に応じた貸し出しですが、時代とともにその役割が多機能化していると思われます。ことに最近の I T化の波の中で図書館の持つ機能に変化の兆しが見えているような気がします。最も明らかなもののひとつは電子ジャーナルでしょう。このような電子ジャーナルを可能にしたのはコンピュータの進歩のお

かげですが、ここ20年のパソコンの発展は著しいものがあります。図書館もその進歩の影響を受けていることは言うまでもないことです。

図書館でのコンピュータの利用は、コンピュータシステムを使った文献情報検索の導入が嚆矢^{こうし}と言えるでしょう。キーワードからそれを含む文献を検索するという方法は、コンピュータに最も適したもので、Index Medicus 等を積み上げて文献検索をしていたところと較べることができない程のスピードで望みの文献に到達できるのは素晴らしいことだと思いました。

しかし、最初に文献情報検索が導入されたころは、まだパソコンも無く図書館の一室に専用線に接続された端末機がありました。端末機と言っても要するに電気式（電子ではない）式のタイプライターで、入力した内容も検索結果も紙の上に印字されると言うものでした。

その後数年経って、パソコンが入手できるようになると、専用線でなく電話で文献情報データベースにアクセスが可能になりました。そのころのパソコンは、8 bit のCPUで、メインメモリーも32 kB（キロバイトですから現在のパソコンがギガバイト近い容量であることを考えると、その3万分の1）といったものでした。それでも、自分の機械でデータベースにアクセス出来るのには感激したものでした。但し、電話でアクセスするには、音響カプラーが必要でした。御存じない方もいらっしゃるかと思いますが、音響カプラーというのはコンピュータの電子データを音声に変換する機器（周波数の高低で1, 0をあらわし、現在ファックスが同様の仕組みを利用）で、電話の送受話器を被せて使います。速度もタイピストより遅いくらい（300 baud でした）で、画面に出てくる文献情報がその場で読めたものでした。

いかに遅かろうが、1966年から当月までのIndex Medicus の文献情報が自分の席に居ながらにして手に入るということは大変有り難いことでした。ただ、当時のデータベースアクセス料は相対的に高く、回線料はもっと

高かったので、すぐに一万円くらいになってしまいました。そのため key word や検索式をあらかじめ良く考えておかないと、あとから高額^{こうごう}の請求がきて大変な目にあいました。検索する時は、幾らかかるかドキドキしながらコンピュータに向かったものでした。

インターネットやLANなどネットワークの普及もあつというまででした。その普及のおかげで、回線料を気にせずに遠くにあるデータベースでも検索ができるようになりました。商業用のデータベースとして大手のDialog はアメリカ西海岸にあります。日本とは時差のあるアメリカの研究者が利用することが多いのでしょうか、日本の勤務時間内ことに月曜日などアメリカ国内で業務時間外だと、大変素早いレスポンスでした。こんなことからインターネットは本当にグローバルということを実感しました。もっとも素早いレスポンスになったのは、データベース側ばかりでなく、こちらが使うコンピュータも、次々に新しいCPUが開発されメモリー空間も飛躍的に大きくなったからでしょう。

現在本学図書館では、いくつものデータベースを利用できます。これはIT化時代の図書館としては、当たり前のことと言えます。しかし、そのデータベースにアクセスする方法はWeb browser を利用するもので、必ずしも使い勝手がよいとは言えないものです。また、データベースで得た情報をさらに使うという点でも十分なものとは言えないと思います。

その中で、図書館でも別な動きが見られはじめています。それは、“Z39.50”というクライアント／サーバーシステムで情報を検索し入手するプロトコールとそれに対応した文献ソフトの利用が出来るようになっていることです。ここで、文献情報検索ソフトと言わずに文献ソフトと言った理由は、そのソフトウェア（例えば筆者が使っているEndNoteの類い）が検索ばかりでなくデータベースとしての情報管理、さらには論文を書いた時の引用文献の本文内での引用ならびに文献リストの自分の望む形式でのフォーマットも可能だからです。投稿するジャーナルごとに引用

文献の表示の形式が異なるので、これは論文を書く時の大きな力になるツールと考えられます。

このプロトコールを使ったソフトウェアの凄いところは、これまで自分の手元にはおけなかった文献データベースを、それがあたかも自分のコンピュータに存在するかのように感じさせてくれるようになったことです。研究者になって以来自分専用の文献データベースが欲しいと思っていました。以前はカードでそろえようと考えたり、その後は一般的なデータベースソフトで構築しようとしてきましたが、その手間ひまに何度も挫折してきました。

しかし、現在では商業用のデータベースそのものが、あたかも自分のものであるかのように自由に検索でき、その結果を保存し、さらに論文を書く時には入手した文献情報を自分が投稿するジャーナルの形式に合わせてフォーマットまでして引用文献リストを作成してくれるようになったのです。30年前にはタイプライターの紙の上への打ち出しでやり取りしていたデータベースが、自分専用のものとして二次的な利用も含めて使えるようになったのです。いわゆる“IT”技術というものの素晴らしさが如実にあらわれていると言えます。

加えて電子ジャーナルがあるので、文献検索とその結果からの必要文献の入手は、飛躍的に楽になりました。

このような現状を見てみると、電子化によって図書館がパソコンの中に入ったと言う表現も過言でないと思われます。希少あるいは貴重な文献の電子化も着々と進んでいるようです。この図書館のいわば「共有」がIT化時代の重要なコンセプトのひとつになってゆくものと思わざるを得ません。

自分の席にいたまま望みの論文を読めると言うことは素晴らしいことだと思いますが、冊子体の図書がなくなることはいけません。それは、人間の認知能力を考えてみると冊子体のページをパラパラとめくりながら必要な情報を発見するという方法が、その能力に適した能率の良い方法と考えられるからで

す。したがって、コンピュータがさらに進歩してそのディスプレイが紙のように薄く柔らかくなり、複数ページをパラパラとめくれるようにならない限り、冊子体の図書がなくなることはいけません。また、冊子体の図書がなくならない限り、その頻度は減るかも知れませんが、人々が図書館に行かなくなってしまうことにならないでしょう。

そう言う時代に図書館がなす役割にはどんなことがあるのでしょうか？ 一つは、学生や駆け出しの研究者に、文献情報検索の方法を教育する場としての役割です。これは既になされていることと思いますが、単に文献情報を探し出す方法を教えるだけでなく、もっと大規模に系統的に教育する必要もあるでしょう。

もう一つは、文献情報や論文内容の二次的な利用に関するルールやマナーを教えることです。電子情報は、二次的な利用が可能なことが特徴ですが、著作権の保護がなおざりにされがちです。音楽CDのことを考えてもらえば、良くわかると思います。

最近学生にレポートを課すると、インターネットでいろいろな情報を集めてくるのだけれど、結局その切り張りだけしてくるので困る、と言うことをいろいろな場面で教官から聞きます。したがって、情報の二次的な利用だけでなく。書くと言う作業の本質を教えることも大事なことになるでしょう。既存の情報をどう理解し整理し自分で咀嚼してオリジナルな考えに発展させてゆくのか、を教育することです。これは研究の本質を教育することになるので、図書館だけでなく大学全体の役割と言うことにもなるでしょうが、オリジナリティの重要性を著作権保護の点から教えるのは、やはり図書館の役割でしょう。

まだ他にいくつかの期待される役割があることと思いますが、出来ることから着実に実現してゆくことが大事かと思います。私も、一利用者としての立場を忘れないようにしながら、この動きに協力してゆくつもりでこれからの任期を勤めてゆきたいと考えております。

(さとう・ひろし)

連載 和算資料の電子化（３）：和算常設展の開催

総務課情報企画掛長 米 澤 誠

平成15年度から着手した本学和算資料の電子化は、予定通り進捗しており、2004年春にはウェブ公開を行う予定です。

ウェブ公開に先立ち、附属図書館の常設会場で和算資料の展示会を開催しました。今回の展示会では、和算の歴史を3期に分けて、その発展史を主要な和算書によりたどることができるよう、約30点の資料を展示しています。

今回の常設展の開催は、ウェブ公開と2004年秋に予定している本格的な「和算」企画展の予告編的な位置付けのものです。できるだ

け多くの方に和算に興味をもっていただくことを目的に、下記の通り、長期間にわたり開催することとしました。ぜひ一度、ご覧になってください。

開催期間：2004年1月26日～2004年7月31日

開催時間：本館の開館時間中

場所：附属図書館本館エントランスホール

以下に、和算の各時期に関する解説と、展示している和算資料名を示します。

第1部 初期の和算：中国数学の摂取から遺題継承による発展

和算とは、江戸時代に日本で発展した日本固有の数学です。

和算は、江戸幕府が開かれ社会が安定してきた時期に、中国の元・明時代の数学の移入からはじまりました。中国から伝わった「そろばん」による掛け算・割り算や、両替・利息算・検地算・測量などの実用的な計算法などが基本でしたが、成立の初期から、ねずみ算に代表される遊戯的要素を取り入れていたことで、多くの読者を獲得しました。

その役割を果たしたのが吉田光由の『塵劫記』で、この書は江戸期を通じて出版されたロングセラーでした。

和算は次第に、商業活動や普請・測量などの実用算術にとどまらず、数学それ自体を目的とした問題も追及するようになります。和算家たちが切磋琢磨するきっかけとなったのも『塵劫記』で、数学問題だけ提示して解答をもとめる「遺題」が大きな役割を果たしました。

[展示資料名]

- | | |
|---------------------------------------|------------------------------------|
| 1. 塵劫記 3巻 吉田光由 寛永8年(1631) | 6. 新刊算法起 2巻 田原嘉明 承応元年(1652) |
| 2. 新篇塵劫記 4巻 吉田光由 寛永18年(1641) | 7. 格致算書 3巻 柴村盛之 明暦3年(1657) |
| 3. 算法統宗 12巻 (明)程大位 万暦20年(1592) | 8. 改算記 3巻 山田正重 万治2年(1659) |
| 4. 割算書 毛利重能 元和8年(1622) | 9. 算法闕疑抄 5巻 礒村吉徳 万治2年(1659) |
| 5. 豎亥録 今村知商 寛永16年(1639) | 10. 算俎 5巻 村松茂清 寛文3年(1663) |

第2部 中期の和算：関流による日本数学の樹立

そろばんが広く普及する明代以前は、「算木」とよばれる計算道具が使われていました。和算家たちは独自の文献研究により、算木による「天元術」という方程式の技法を発見しました。これによって和算の数学としての守備範囲は一挙に拡大しました。

関孝和は、独自の記号法（傍書法）を創始し、天元術の応用法の開拓などで、和算の基礎を打ち立てました。

また、関には多くの門弟が師事し、学術的な成果を生み出して行くとともに、次第に流派を形成し和算の主流となります。

一方、和算は大衆化も進み、このころには和算の成果を絵馬（算額）にして、神社仏閣に奉納する「算額奉納」という文化が全国的に普及しました。東北地方は、多くの算額が現存することで知られています。

〔展示資料名〕

- | | |
|---|--|
| 11. 算学啓蒙 3巻 (元) 朱世傑 (1299) | 18. 算法發揮 3巻 井関知辰 元禄3年 (1690) |
| 12. 算法根源記 3巻 佐藤正興 寛文9年 (1669) | 19. 長崎むじん物語 中村政栄 元禄4年 (1691) |
| 13. 算法発蒙集 5巻 杉山貞治 寛文10年 (1670) | 20. 和漢算法 9巻 宮城清行 元禄8年 (1695) |
| 14. 古今算法記 7巻 沢口一之 寛文10年 (1670) | 21. 大成算経 20巻 関孝和ほか 宝永7年 (1710) |
| 15. 算法至源記 5巻 前田憲舒 寛文13年 (1673) | 22. 括要算法 4巻 関孝和遺稿 荒木村英検関正徳2年 (1712) |
| 16. 発微算法演段諺解 4巻 建部賢弘 貞享2年 (1676) | 23. 綴術算経 建部賢弘 享保7年 (1722) |
| 17. 算学啓蒙諺解大成 3巻 建部賢弘 元禄3年 (1690) | |

第3部 後期の和算：日本数学の発展普及と諸流派の発生

当初関流では、その研究内容・方法は秘伝で公刊されることはありませんでした。著作の多くは写本として残され、今に伝えられています。

また、奥義を究めたものには免許皆伝が与えられるという家元制の形で、全国規模で門弟たちを育成して行きました。

ところが、久留米藩主が和算書を刊行し、関流の和算を公にしてしまって以降、関流の中からも著作が刊行されるようになりました。

関流の和算が公にされたことから、最上流のように論争を通じて別流派が成立するということもありました。また、関流の中からも、独創的な研究成果をあげることで、別流派を名のる和算家もでてくるようになりました。

幕末に西洋数学が移入される中でも、和算書は刊行され続けました。しかし明治期には、軍事・科学技術の基礎となる近代数学に取って代わられることとなり、和算は算盤や遊戯問題という形で今に伝わります。

[展示資料名]

24. **拾璣算法** 5巻 有馬頼僮 明和6年(1769)
25. **精要算法** 3巻 藤田貞資著 安島直円訂 天明元年(1781)
26. **神壁算法** 藤田嘉言編 藤田貞資閲 寛政元年(1789)
27. **改精算法** 会田安明 天明5年(1785)

28. **非改精算法** 神谷定令 天明7年(1787)
29. **絵本工夫之錦** 舟山輔之 寛政10年(1798)
30. **算法点竄指南録** 坂部廣胖 文化12年(1815)
31. **算法新書** 長谷川寛閲 千葉胤秀編 天保元年(1830)



常設展示風景

今回の展示では、和算資料や著者についての解説だけではなく、和算の研究内容や数学遊戯についての解説により、一般市民の方々にも楽しめるようにと心がけています。展示

内容についてのご意見・ご要望がありましたら、備付けのアンケート用紙でお寄せください。

(よねざわ・まこと)

ねずみ算に挑戦！

正月

2月

上の14匹が父母となりそれぞれ12匹を生む

【問題】
正月に、ねずみの父母が子どもを12匹生んで、親子とも14匹になるとします。
この14匹のねずみが、2月には7組の父母として12匹づつ生むと、全部で98匹となります。
このように月に一度づつ、親も子も孫もひ孫も12匹づつ生むとしたら、12月には何匹になるでしょうか？

【答え】
→解答1をみてください。

一人5役の35年と図書館の思い出

閲覧第二掛長 前 田 裕 子

実験で徹夜あけの院生がまた資料を検索するために、図書室に入ってくるような活気あふれる電気通信研究所が私の最初の図書館勤務でした。

私には結婚に際して、図書館の仕事を将来も続けるのであれば、5役を果たすことという夫との約束がありました。1つ目は図書館員、2つ目は嫁、3つ目は妻、4つ目は母親、そして5つ目は主婦という5つの役割でした。体が5つあるわけではないので、バランスよくこなしながらのスタートとなりました。

実際は大変なことばかりで1つ1つ壁にぶつかりながらの5役でした。それでも職場にくと、残りの4役はすっかり頭から離れ、図書館の仕事が楽しく、新しい知識をどんどん身につけていくことの嬉しさや、利用者へのサービスの考え方も上司に教えられながら、無我夢中で過ごしたことが昨日のように思い出されます。かつての上司は「図書館員は地の果てまで行っても利用者が必要とする情報を提供する心構えを常に持って、利用者のニーズに応えなければならない」とよく言われたものです。今のようにコンピューターで容易に検索できるという時代ではありませんでしたので、二次資料の使い方も食いつくように学び、特別にお願いして化学の講義を末席で聴講させてもらったり、そうした沢山の方達の好意で図書館の仕事の深さを知り、「利用者に対してオールマイティなれ」と心がけようとしてきました。

そうした折、幸いにも昭和61年度大学図書館職員長期研修に参加する機会があり、暑い7月から8月の3週間、つくば市の図書館情報大学（現筑波大学）での研修に向かいまし

た。職場は電算化にむけてID貼付の真只中、女性だからこそ少しでも後輩達に道を開きたいという気負いと、この3週間完全に4役を放棄しなければならない不安と複雑な気持ちとが入り混じっての参加でした。少しでも残りの4役を果たすため毎週金曜日の夕方帰仙し、日曜日の夜また、つくば市に戻るのが研修中の私の暮らし方でした。

研修には何回か参加しましたが、私にはこの長期研修がどの研修よりも一番心に強く残っています。北から南まで沢山の人達と知り合いになることができ、夜遅くまで大いに議論し、飲みに行くことが楽しみの一つでもありました。講義が終わると、太陽が沈み白いボールが見えなくなるまで、虫に刺されながら、ソフトボールに興じ、大汗をかき楽しんだことも思い出の一つでもあります。やはり「同じ釜の飯を食った」という意識が我々研修生の結束を固め、翌年からは毎年、各地で集まりをもっており、皆勤賞の方もいます。この集まりは定年になっても健康でいる限り続けていこうということで、毎年楽しみにしています。ただ残念なことは、不幸にして50代の働きざかりの方達がすでに4名も仕事途中で亡くなられたことです。どんなにか無念だったろうと胸の痛む想いがします。

こうしたネットワークは特に、平成16年度からの法人化に向けての情報交換などに大いに役立っており、この研修は図書館の仕事をしていくうえでも、さらに退職後の生きがいからみても、私の大きな財産となっています。

私が他の研修に参加したり、図書館員としての役割で一層忙しくなって間もなく、舅、姑も相次いで鬼籍に入り、嫁としての役は免除され、図書館の仕事にますます力をいれる

ことができるようになりました。忙しい掛といわれた逐次刊行物掛も掛員の協力で無事果たすことができました。

35年の図書館生活は電気通信研究所図書室から始まり、閲覧第二掛まで通算7掛の異動でした。最後の3年間を閲覧第二掛で仕事ことができましたことは、幸いにも国宝（類聚国史、史記）をはじめ、狩野文庫、漱石文庫等多くの貴重書に触れる機会に恵まれたことであり、東北大学附属図書館がこうした貴重な資料を所蔵しているということに驚きを覚えたことです。まだ整理されていない沢山の貴重な資料もできるだけはやく整理して、必要としている利用者に提供できることを願っています。これらの貴重資料は私にとっては「猫に小判」ではありましたが、掛員の支えにより充実した3年間を過ごすことができ感謝しております。

図書館員の役割は、利用者の求める情報の迅速な提供等、知的労働者であると同時に、書庫整理等の肉体労働者でもあるということです。これは長い図書館生活をとおして強く感じているところです。

今は、妻役と図書館員役（3月いっぱい）の2つの役割を充分とはいえないまでも行っています。子供たちは数年前に完全に親離れし（当の親は子離れできず、まだ母親役にしがみついております、子供たちから拒否されているのが現状です）

妻役はいまのところ拒否されておられませんので、これからも継続していこうかと思っています。主婦役はここ数年、夫に便乗し役割を返上していましたが、定年と同時に再採用されそうですので、ようやく5役から妻役と主婦役の2つの役割に変わりつつあります。

法人化に向けて大きく変動しつつある大学図書館を担っていかれる若い方々には、図書館業務のみならず、常に多くのことに挑戦し、初心を忘れず、真摯な気持ちで仕事に向き合ってほしいと心から願っております。

図書館員として35年間いろいろの諸条件を抱えながら、最後まで完投することができたのは、諸先輩をはじめとする同僚・後輩の方々のご協力とご支援および家族の応援があったからこそと心から感謝し、御礼申し挙げます。長い間本当にありがとうございました。

（まえだ・ひろこ）

学術コミュニケーションの変革としての SPARC 活動

総務課情報企画掛長 米 澤 誠

1. 学術コミュニケーションの危機

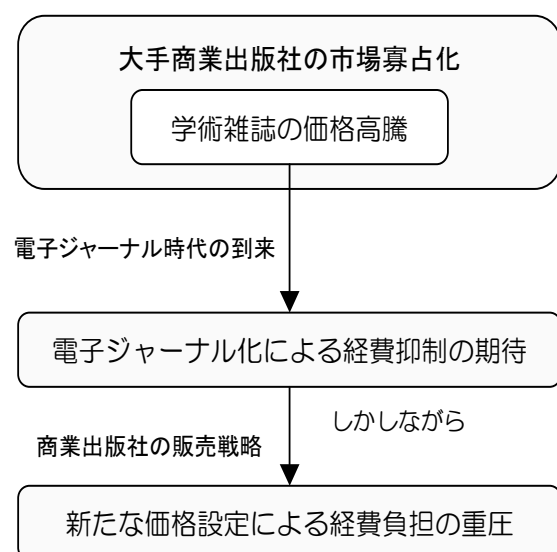
(1) 価格高騰と電子ジャーナル化

1655年、英国での Philosophical Transactions という雑誌の誕生以来、学術雑誌は、研究成果の公表手段として重要な地位を占めてきました。

しかし近年、大手商業出版社の市場寡占化を背景として、大学における学術雑誌は、価格高騰と購読中止の悪循環という危機に直面しています。わが国では、過去10年間で外国雑誌の受入タイトル数はほぼ半減し、研究者が必要とする学術情報が国内において入手できないという事態が生じています。

一方、この数年で学術雑誌の電子化には急速な進展があり、主要な学術雑誌が電子ジャーナル化されてきました。この電子ジャーナル化では、印刷・製本・配送などの経費が不要となるため、価格の高騰が押さえられるかもしれないという期待をもっていました。

しかしその期待は、多くの場合、従来の冊子体購入経費をベースとした価格設定などにより大きく裏切られ、むしろ大学側は経費負担の重圧に直面しています。



(2) 大学図書館の対抗措置

国立大学図書館協議会（以下、「国大図協」という）では、学術雑誌の価格高騰と電子ジャーナルの新たな価格設定に対抗するため、2000年に電子ジャーナルタスクフォースを設置し、大手商業出版社と協議を行ってきました。その結果、一部の出版社との間で、価格高騰の部分的抑制や電子ジャーナルのアクセス範囲の拡大といった、大学側に有利となる一定の成果をあげてきました。

しかし、これらの活動にもかかわらず、雑誌価格高騰の大きな流れを押しとどめる、根本的な解決にはいたっていないのが実情です。

(3) 研究者のコントロール機能の喪失

学術コミュニケーションの危機は、雑誌価格の高騰にとどまりません。例えば、学術論文の評価、編集、流通の一連のプロセス全体が出版社のコントロールのもとに置かれています。そのことで、価格設定のプロセスに研究者が関与できず、論文の著作権までもが出版社に譲渡されているのが実態です。

学術コミュニケーションのコントロールが、本来主役であるはずの研究者の手から失われていることこそ、学術コミュニケーションの危機の本質であるといえます。

2. 学術コミュニケーションの変革を！

(1) SPARC の誕生

上記のような状況を変革するために、欧米では学協会の出版を支援する SPARC (Scholarly Publishing and Academic Resources Coalition) というプログラムが1998年に誕生しました。

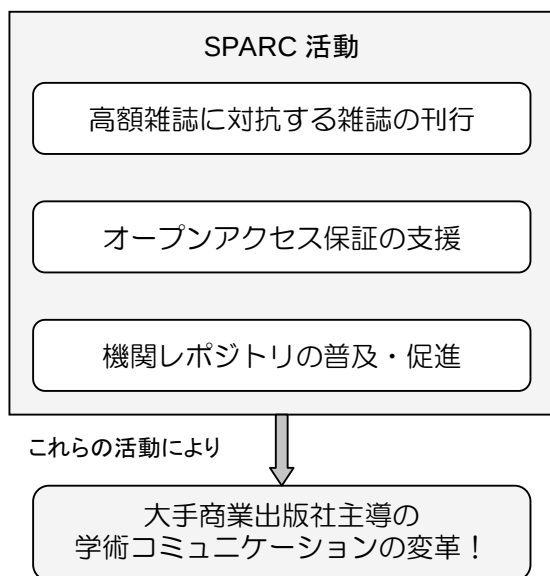
SPARC を発足させたのは北米研究図書館協会、新たな研究成果の発表システムとし

て、大手商業出版社の高額雑誌に対抗できる雑誌（代替誌）を刊行しています。欧州では2002年に SPARC Europe が、日本では2003年に SPARC/JAPAN が誕生しました。

（２）SPARC の特色

例えば、米国化学会の Organic Letters(OL) は、Elsevier 社の Tetrahedron Letter(TL) に対抗する学術雑誌として刊行されました。現在、同誌は Journal of Organic Chemistry と並びインパクトファクターが高く、TL 誌をはるかに凌ぐほどに成長しています。価格は TL 誌のほぼ 3 分の 1 に設定されており、電子ジャーナルとしても提供されています。

また、SPARC が支援している BioMed Central は、ユニークな生物医学系出版社です。この出版社が取り扱う 100 以上の学術雑誌は、オープンアクセス保証の理念のもとで、無料でアクセスでき、アーカイブも保証されています。科学研究の進展には、研究者への公開が不可欠であるということを原則としている出版社なのです。



（３）機関レポジトリの普及・促進

欧米ではまた、大学コミュニティの研究成果の保存・管理・提供システムとしての「機関レポジトリ」を導入する大学・研究機関が増えています。これは、個々の研究者の原著

論文を、所属の大学からウェブ公開して、誰もが自由に閲覧できるという学術コミュニケーションを実現するものです。SPARC は、この機関レポジトリの普及・促進も支援しています。

（４）Create Change

Create Chang は、SPARC 活動を含めた学術コミュニケーションの改善を目的とした教員・図書館員の行動を支援する米国の組織です。日本では、国大図協がこの活動をサポートしており、学術コミュニケーションの問題やとるべき行動を支援するための資料を公開しています。ぜひ一度、下記サイトをご覧ください。

URL:<http://wwwsoc.nii.ac.jp/anul/sparc/create/home.html>

３．何をなすべきか？

（１）研究者の方々をお願いしたいこと

学術コミュニケーション変革のため、研究者の方々には、まず次のような行動を考えていただきたいと思います。

- ① 学外に向かって
 - ・国内外の様々な変革活動との連携・協力
 - ・電子ジャーナルの visibility の向上
- ② 学内に向かって
 - ・図書館と協力した電子ジャーナル契約の促進
 - ・学生・研究者に向けた電子ジャーナル利用の啓蒙

また、自分の専門分野あるいは所属学会の学術雑誌が、Create Change 活動にどのような立場をとり、どのように取組んでいるかを認識していただくことが必要だと考えます。

研究者の方々には、大手商業出版社の雑誌価格高騰の現状について、再度お考えいただいた上で、以下のマークが付されている SPARC 活動に関心を寄せていただきたいと思います。



代替誌(対抗誌)



非営利的団体助成



先端的项目プロジェクト

米国 SPARC :

<http://www.arl.org/sparc/home/>

(2) 附属図書館としての取組み

附属図書館では、Create Change の日本への普及をサポートする国大図協の国際学術コミュニケーション特別委員会の一員として活動しています。

SPARC/JAPAN の活動の支援も積極的に行っており、2003年8月には国立情報学研究所との共催で、地方大学としては初めて SPARC/JAPAN 事業説明会を開催しました。この説明会が契機となり、2003年度の SPARC/JAPAN パートナーに、本学理学研究科数学専攻で刊行している「東北数学雑誌」など、仙台から2誌が採択されることとなりました。

さらに、2004年1月には国立情報学研究所と本学数学専攻との共催で、米国 SPARC が支援する数学・統計学分野の電子ジャーナルプロジェクト Project Euclid のワークショップを、日本で初めて開催しました。この説明会には、全国の主要数学雑誌の編集者および図書館関係者、総勢54名が参加し、Project Euclid を推進している米国コーネル大学図書館の責任者からの説明を受け、情報交換を行いました。研究者と図書館員が連携する活動としての SPARC を、日本で初めて具体化したものと評価されています。

附属図書館では今後とも、日本における Create Change 活動を支援する役割を果たして行きたいと考えます。



Project Euclid からの説明



「東北数学雑誌」編集長 西川教授の説明

なお、この記事は、以下の資料の記述を参考にしたものです。

- ・「Create Change：学術コミュニケーションの変革を！」、国立大学図書館協議会 国際学術コミュニケーション特別委員会、2003

また、SPARC/JAPAN については、以下の URL を参照してください。

<http://www.nii.ac.jp/sparc/index.html>

(よねざわ・まこと)

平成15年度東北大学附属図書館企画展記念講演会講演録 「明治三十三年の漱石、子規、晩翠」

東北大学文学研究科教授 佐 藤 伸 宏

はじめに

本日の私の話は、「明治三十三年の漱石、子規、晩翠」というタイトルを付けております。この三者の関わり合い、特に夏目漱石と正岡子規との非常に親密な交流、それから漱石と土井晩翠との交渉については、これまで様々な言及がありまして、多くのことが明らかにされています。今日の私の話は、そうしたこれまで語られて来た漱石、子規、晩翠の具体的な交遊関係をあらためて辿るということはいたしません。それでは今日、どのような話をしようとしているのかといえますと、漱石、子規、晩翠における明治33年という時点に焦点を当てて見ようと考えています。

漱石における明治33年と言いますと、これは作家・夏目漱石が誕生する以前でありますので、正確に言えば夏目金之助ということになります。当時、熊本の第五高等学校の教授であった夏目金之助は、この明治33年の9月に留学先のイギリスに向けて出帆することになります。これは日清戦争後の第一回の官費留学生としての派遣でありまして、ドイツ船のプロイセン号に乗ってイギリスに向けて旅立つことになるわけです。これは皆さんもよくご存知のことだと思います。今回、東北大学に新収資料としてたくさんの漱石関係の資料が入ったわけですが、その中に、漱石が留学先に向けて旅立つ、その旅の途次での手紙、あるいはイギリスのロンドンに着いてからの手紙など、妻の鏡子へあてた書簡が多数含まれています。今回の展示の目玉の一つでもあるわけですが、たいへんに貴重な資料だと思います。

この明治33年という年は、漱石にとって極めて重要な意味を持ったイギリス留学の年であるわけですが、実はこれから述べますよう

に、正岡子規、土井晩翠にとってもこの年は非常に重要な意味を担うことになります。この一年が、その後の三人の文学者としての歩みを決定的に方向付ける、言わば屈折点のような年になると言っても良いかと思います。

今日の私の話は、そのような重要な屈折点、転回点となるその年の、三者それぞれの状況、動静に目を向けてみたいと思います。明治33年を西暦に直しますと1900年、19世紀の最後の一年となります。この同じ時間を、この三者が、それぞれどのように生きたのか、それぞれどのような固有の生を生きていたのか、見ていきたいと思っています。

1. 明治三十三年の正岡子規

（1）子規による俳句、短歌の革新運動

それでは、まず正岡子規の問題から始めたいと思います。子規における明治33年について考えていきますと、二つのポイントが浮び上がってきます。その一つは、まず、子規の文学活動がこの年、非常な進展を見せるということです。それからもう一つは、子規における病の悪化ということが挙げられます。

子規の病について、あらかじめ少しだけ触れておきたいと思いますが、子規が結核のために多量に咯血したのは、明治22年5月、子規の23歳の時でありました。その後、明治28年5月には2度目の大咯血、翌年になって子規の病が結核によるカリエスであるということが判明します。そしてこの明治33年に至って子規の病は非常に重くなるのです。衰弱激しく、ほとんど身動きのできない状態となります。またこの年の8月には3度目の激しい咯血がありました。このような中で、子規は、死の予感に強くとらわれることとなります。そのことを子規は書簡その他の中で繰り返

返し書き付けております。

明治33年というのは、このように非常に病が重くなって行くということ、一方では文学活動が大変大きな進展を見せていくということ、この二つのことがポイントとなってきます。そして実はこの二つのことは、深く関係していると考えられるのですね。

初めに、子規の文学活動の進展、あるいは深まりについて少し考えて見たいと思います。子規の文学活動と言いますと何と言っても、俳句と短歌の革新運動が挙げられます。明治25年から子規は俳句の革新運動をはじめ、続いて明治31年からは短歌の革新運動に取り組みます。伝統的な俳句、短歌を革新すること、新しくすること、言い換えると俳句や短歌を近代化すること、さらに言い換えますと俳句と短歌を明治日本の近代文学として成立させようとする、このことが子規の目的であったわけですね。

ここでこうした子規の革新運動について確認しておきたいのですが、この子規の活動の基盤、ないしは根底にあった方針は何であったかと言いますと、それは端的に言って、美の普遍的な基準を見定めるということでありました。俳句や短歌を含む文学、そして文学のみならず、美術その他のあらゆる芸術、その全体を評価するための同一の基準を定めること、そういう普遍的な評価の基準——子規自身は「標準」という言葉を使うんですけども——そういった芸術の総体を同一の基準で評価するための、その普遍的な評価の基準というものを可能な限り見定めることが肝要であると、子規は考えていたわけですね。つまり、そのような普遍的な基準、「標準」に基づく評価に耐え得る俳句や短歌こそが、近代の芸術、近代の文学の名に値すると子規は考えたわけですね。同時にそういった俳句や短歌こそが、ヨーロッパの近代文学にも対抗できると子規は考えています。

そしてその普遍的な「標準」として子規が取り出したのが、「写生」でありました。写生とは、対象をありのままに写し取るということ、つまりリアリズムの美ということです。

子規はこのような考え方の中で、それまでの俳句や短歌を空想とか理屈に堕したものととして、徹底的に否定していくのですね。そして子規は、写生の句や歌というものを、近代の俳句、短歌のあるべき姿として提唱していく、このような形で子規の活動は進められていくのです。

このようにして子規の革新運動は非常に旺盛に進められていきます。子規はたくさんの俳論、歌論を発表しているのですが、しかし、それを読んでいきますと一つ疑問に思う点があるのですね。それは、俳句と短歌との関係の問題です。子規は、俳句と短歌というものを同じ「短詩形」の文学として、さきほど述べましたように、写生を原理としていろいろと論じていくわけですが、両者の区別、俳句と短歌の違いについては、どうもあまり問題にしてはいなかったように見えるのですね。言い換えますと、短歌と俳句の区別とか関係についてはかなり曖昧にされていて、時には、短歌というのは要するに俳句を長くした形式であって、両者の本質は同一である、といった言い方もなされているのですね。これは、さっき言いましたように、普遍的な美の基準というものに基づいて、俳句、短歌を革新しようとした、そういうところから不可避免的に生じてきた事態であるとも考えられるのですけれども、そういう俳句と短歌との関係という問題が、実はこの明治33年になって子規に非常に意識化されてくる、自覚化されてくると考えられるのです。

(2) 俳句と短歌の相違

では、以上のような点からもう少し子規の問題について考えていきたいと思います。この明治33年において俳句と短歌の関係の問題について子規が自覚的になるという、そのことを考えるうえで大変興味深い書簡があるのですね。それは、明治33年3月18日付と推定される坂井宛て書簡です。坂井^久良岐（伎）という名前で短歌を作っていた歌人です。この書簡の中で語り出されていることは何かと言いますと、それは、短歌

と俳句との差異の問題なのですね。言い換えますと、短歌と俳句、それぞれの固有性の問題です。子規は、こんなふうに言っています。

只一昨年と今年と少しく考の変りたるは、短歌は俳句の如く客観を自在に詠みこなすの難き事、又短歌は俳句と違ひて主観を自在に詠みこなし得る事、此二事に候。一昨年頃は俳句に詠み得る景色は何にても三十一文字に入れ得べきやうに信じ候ひしかども實際経験を積むに従ひ短歌は俳句の如く軽快なる微細なる景色を詠み難きを發明致候。(中略)斯の如く短歌が占領する客観の区域は俳句より狭き代りに、短歌が占領する主観の区域は俳句より遙に広く候。雑の俳句、時間的の俳句に名句少きに拘らず、雑の短歌、時間的の短歌に名作多きは此故に候。

(坂井辨宛)

子規が新たに「發明」した考えというのは短歌と俳句のそれぞれが固有に持つ表現の領分の問題です。ここで子規はまだ多少ためらいの中で語っているようにも見えますのですが、この書簡の中で子規が語っていることを要約、整理してみますと次のようになるかと思ひます。

つまり子規がここで探りあてているのは、俳句というのは対象そのものを客観的に捉えることに適している、例えばスナップショットのように「軽快なる微細なる景色」を鮮明に写し取ることができる、そうした言わば空間的な性質を備えたものである。それに対して短歌は、「主観を自在に詠みこなし得る」点に特徴がある、そしてその対象と自己——自己というのは詠み手としての自己ということですが——との関係を含みこんだあり方は、俳句と違って、時間的な性格、あるいは時間的な要素を孕み込んで来ることになる。そういったような両者の本質的な相違の認識というものが、ここでは告げられている、と言って良いと思うのですね。

これまで子規は写生というものを基軸として俳句、短歌の革新運動を進めてきたわけですが、その中で両者の差異というものを自覚的に問題化することはなかったわけです。そ

のような子規が、この明治33年に至って、両者それぞれの固有性にはっきりと目を向けることになった。

明治33年の子規が、このような新たな一歩を踏み出していたことを考えると、同じ年にしたためられた大変不思議な書簡の持つ意味も見えてくるように思ひます。それは、二通の書簡を引用しておきましたが、10月2日付の赤木亀一宛の書簡と、同じ年の8月7日付け内藤素行宛の書簡です。赤木亀一は赤木格堂という名前で俳句、短歌を作っていた人であり、内藤素行は、内藤鳴雪という、子規と大変交流の深かった俳人であります。この両者にあてた書簡、これらは従来から謎の書簡と捉えられていて、一体何なのかと問題にされてきたものであります。それにはこんなふうにあるのですね。

夕月や芒吹かるゝ塀の外

右の句を短歌に翻訳して御送附被下候やう奉願候
尤当分の内句も歌も秘密になし置被下度候 以上

(明治33年10月2日 赤木亀一宛)

左の歌を俳句に訳して御送り下されたく願ひ奉り候。これは、予て申し上げ候通り、衆人にやらすつもり故、歌も句も当分秘密になし下されたく願ひ奉り候。

きのふまでありにし家はこぼたれて萱の上なる露
の白玉

(明治33年8月7日 内藤素行宛)

たいへん面白い書簡です。そして全く同じ趣旨の書簡が、明治33年にはこれ以外にも2通書かれており、合わせて4通の全く同趣旨の書簡が書かれているわけです。ここで子規は、俳句から短歌への、あるいは短歌から俳句への「翻訳」を依頼しているのですね。そして、内藤鳴雪宛の書簡に出てきますけれども、「衆人にやらすつもり」と述べられているように、非常に強い意欲を持ってなされた問いかけであるわけです。この「翻訳」という言葉がたいへん面白いと思ひます。

つまり、ここで子規が要求しているのは、

俳句に詠み込まれた対象、内容をそのまま移し入れる形で短歌に作りかえてみよ、ということです。あるいは逆に、短歌に詠まれた対象、内容をそのまま俳句でもって作り替えて見よ、ということなのですね。残念ながら、子規の要求に対する返答だとか、あるいはこれらがどのように扱われたのかということについては、何の資料も残っておりません。

では、ここで試みられている、あるいは確かめられようとしているのは、一体どのようなことなのでしょう。それは、恐らく、このようなことではないかと思えます。短歌と俳句の形式の違いの中で、対象の捉え方だとか生み出される作品世界にどのような違いが必然的に生じることになるのか、あるいはもっと噛み砕いて言うならば、同じものを対象にしながら俳句から短歌へと作り替えられることによって、その対象の捉え方とか生み出される作品世界にどのような変化、違いが生じるのか、ということです。そういうことを確認するための試みであったと考えることができます。つまり、さきほどの坂井辨宛ての書簡で語られていた、短歌と俳句の相違についての認識、それをこのような「翻訳」の試みを通して確認すること、そこに子規の意図があったと見て間違いはないだろうと思えます。

（３）言葉の音楽性と句の自立

このような新たな子規の認識が、子規の短歌や俳句の実作そのものにも反映して行くことは言うまでもないことだと思います。この明治33年という年に、短歌と俳句それぞれの固有性への認識を深めて行く中で、子規自身が実際に作る短歌や俳句というものも新たな深まりを見せて行きます。この明治33年というのは、先ほどもふれたように病の悪化によって作品数は激減して行きます。しかし、この年には、子規の代表作と言っても良い、非常に優れた俳句や短歌が生み出されることになるのです。

ではこれからこの明治33年の作品を少しだけ取り上げてみたいと思いますが、ただし、

その前に一言ふれて置きたいことがあります。それは、この前年、つまり明治32年12月のことですが、子規が病室としていた部屋の南側を「ガラス障子」に替えたのです。「新年雑記」（注1）というエッセイの中に記されておりますが、部屋の南側をガラス戸に替えることによって、子規は病床についたまま、このガラス戸を通して外界の様々な光景を見ることが出来るようになるのです。この「新年雑記」の中で、子規は幾度も幾度も「見える」という言葉を繰り返します。頻りに繰り返しながら、その喜びを率直に伝えているわけですね。実は、このことは、子規のこの時期の句境、歌境の進展に大きく関わってきます。

さて、子規の明治33年の作品を俳句の方から見ていきたいと思えます。

鶏頭の十四五本もありぬべし

これは明治33年9月に子規庵で開かれた句会で詠まれた一句なのですけれども、これはたいへん良く知られた俳句で、子規の代表作と言われている俳句です。実際、代表句にふさわしい見事な作品だと思います。群がり生えている十四五本の鶏頭の姿が非常にくっきりと写し取られています。実は病床にあった子規が、ガラス障子を通して庭に向けていた視線が捉えていた光景というのは、「消息」（注2）という文章の一節をご覧になっていただければ分かるように、この鶏頭ばかりではありませんでした。子規の視線は、その傍らの葉鶏頭、小菊も捉えていたはず。しかしこの「鶏頭の十四五本もありぬべし」という一句は、群ら立つ鶏頭のように焦点を絞って、それだけをきっぱりと切り取るわけですね。そこに、非常に明瞭な像を結ぶ、自立的な作品の空間が生れています。そういう一句の持つ自立性だとか、完結性というものが、この一句の特徴となっていると思えます。

このような一句の持つ自立性、完結性というのは、色々な観点から捉えていくことができるのですが、ここでは例えばこの句の持つ

「言葉の音楽」ということに目を向けて見たと思うのですね。この一句の持つ言葉の音楽によっても、今見たような自立性や完結性が支えられています。言葉の音楽といっても、ここでは、「ア・イ・ウ・エ・オ」といった母音に着目してみたいと思います。このアイウエオという母音に着目して見ますと、まず皆さんも口ずさんでいただければと分かると思いますが、「鶏頭の十四五本も」という部分は、オの母音が頻りに繰り返されており、それが基調を成しています。それに続く「ありぬべ（し）」のところですが、ここは母音の調べでいいますと実は「アイウエ」と続くのですね。これは非常に自然で滑らかな母音の動きです。そして末尾の「べし」は、母音で言えば「エ・イ」となります。そしてこの「エ・イ」という母音は、冒頭の「鶏（頭の）」の「エ・イ」の反復となっているわけなのです。このようにこの一句の持つ母音の働き、その整いと秩序のもたらす安定した音楽性というものが、この一句の動かし難い自立性と完結性を強めていると言えます。

実は、この作品は、さきほど子規の代表句とされていると言いましたが、発表された直後から、色々の批判もあったのですね。これは非常につまらない句じゃないかといった批判、そしてまた、「鶏頭の七八本もありぬべし」だとか「枯れ菊の十四五本もありぬべし」でもいいじゃないか、と揶揄されることもあったのですね。しかし、さきほども言いましたように、この句の音楽性がもたらす一句の動かし難さということから考えて、そういった批判は適切ではないということがお分かりになるかと思います。「十四五本」のところを「七八本」にかえたり、あるいは「鶏頭の」を「枯れ菊の」にかえると、言葉の持つ音楽性というものがすっかりかわってしまいます。この点からもこのような批判の妥当性は疑われるところです。

ともかく、この一句からは、言葉の音楽性にも支えられながら、輪郭明瞭な映像をくっきりと呈示する、そういう作品空間の自立性、完結性といったものを窺うことができます。

そういったところがさきほど言った俳句の固有性についての子規の認識の具現化であると考えられるのではないかと思います。

（４）短歌と時間性

では次に短歌の方を見て行きたいと思います。「ガラス窓」と「庭前即景（四月廿一日作）」という二つの連作を取り上げてみます。

ガラス窓

いたつきの間のガラス戸影透きて小松の枝に雀飛ぶ見ゆ
病みこやす間のガラスの窓の内に冬の日さしてさち草咲きぬ
朝な夕なガラスの窓によこたはる上野の森は見れど飽かぬかも
冬ごもる病の床のガラス戸の曇りぬぐへば足袋干せる見ゆ
ビードロのガラス戸すかし向ひ家の棟の薺の花咲ける見ゆ
雪見んと思ひし窓のガラス張ガラス曇りて雪見えずけり
（中略）
物干に来居る鴉はガラス戸の内に文書く我見て鳴くか
（中略）
ガラス張りて雪待ち居ればあるあした雪ふりしきて木につもる見ゆ
暁の外に雪見んと人をして窓のガラスの露拭はしむ

庭前即景（四月廿一日作）

山吹は南垣根に菜の花は東堺に咲き向ひけり
かな網の大鳥籠に木を植ゑてほつ枝下枝に鶯飛びわたる
くれなるの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる
（中略）
くれなるの若菜ひろがる鉢植の牡丹の蕾いまだなかりけり
春雨をふくめる空の薄曇山吹の花の枝も動かず家主の植ゑておきたる我庭の背低若松若緑立つ

百草の萌えいづる庭のかたはらの松の木陰に菜の花咲きぬ

まず、この「ガラス窓」の連作の方ですが、すぐにお気づきになるかと思いますが、「見ゆ」という表現が繰り返し用いられていますね。病床にあって身動きのとれない子規にとって、ガラス障子を通して外を見えるということは、外界との唯一の通路を開く行為として非常に重要な意味を持っていたはずであります。「見ゆ」といっても単に「見える」「目に入って来る」といった受動的なあり方ではありません。むしろそれは外部に視線を凝らす、積極的な行為であって、その視線が様々なものを捉えていくわけです。そこで捉えられているのは、例えば、小松の枝に雀が飛ぶ姿であったり、干されている足袋であったり、あるいは物干し竿で鳴く鴉であったり、非常にありきたりの、少しも珍しくない日常的な光景なのですね。しかしこれらの一首一首を読んで行くと、それらのものを見出した子規の喜び、外界に向けた視線がこれらのものを発見したときの喜びが、確かに伝わってきます。

さらに、3首目をご覧いただきたいと思います。「朝な夕なガラスの窓によこたはる上野の森は見れど飽かぬかも」。あるいは後ろから2首目になりますが、「ガラス張りて雪待ち居ればあるあした雪ふりしきて木につもる見ゆ」という歌があります。これらの短歌に典型的に認められるように、「見る」という喜ばしい行為を持続、継続することによって、作品の中に時間の要素が必然的に入り込んできています。このような時間性というのは、もう一つの連作である「庭前即景」にもはっきりと窺うことができます。

「庭前即景」は明治33年4月21日に作られた連作ですが、この中の3首目、「くれなるの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる」はたいへんよく知られている短歌です。この一首で言いますと、「二尺伸びたる」という表現の中に、この薔薇を若芽の頃から見続けてきた時間というものが巧みに織り込まれていると言っていいでしょう。そ

れからまた後ろから4首目の歌を見てみましょうか。「くれなるの若菜ひろがる鉢植の牡丹の蕾いまだなかりけり」。この一首の場合にも、「いまだなかりけり」という字余りの結句の表現が、蕾が出るのを待ちつづけている時間の経過を作品世界に呼びこんでくるわけです。

このように外界のものを様々に見出していく眼差し、そしてその持続的な視線の中に生じる時間的な性格、このような中に子規の感情が流し込まれているのです。これらの点を、俳句とは全く異なる短歌の固有性の認識、その認識を背景とした見事な達成として捉えることができるのではないかと思います。このように明治33年の正岡子規は、俳句と短歌との差異性に裏打ちされた大変見事な作品を自在に生み出して行くことになったわけです。

(5) 「写生文」と他者との共感への願い

さて、もう少し子規の問題にふれておきましょう。この年の子規は重い病の床に就きながらも、新たな文学活動に取り組むことにもなります。その新たな文学活動とは、「写生文」または「叙事文」と呼ばれるものです。

子規は、評論「叙事文」(注3)を発表したことをきっかけにして、以後、写生文、叙事文の制作に非常に意欲的に取り組んでいくことになります。写生文とは何かと言いますと、ごく単純に言えば、子規はそれまで俳句や短歌において写生ということを提唱してきたわけですが、その写生を散文に応用、適用したものだと言って良いかと思います。

評論「叙事文」には、「或る景色又は人事を見て面白しと思ひし時に、そを文章に直して読者をして己と同様に面白く感ぜしめんとするには、言葉を飾るべからず、誇張を加ふべからず只ありのまゝ見たるまゝに其事物を模写するを可とす」とあります。子規は、このような新たな文学活動をはじめることになるわけですが、私がここで注目したいのは、「叙事文」という評論の中で、子規が頻りに読者の問題に言及していることです。例えば、「叙事文」の中には、先程引用した部分です

が、「或る景色又は人事を見て面白しと思ひし時に、それを文章に直して読者をして己と同様に面白く感ぜしめんとするには」とあります。それからまた、「とにかく読者をして作者と同一の地位に立たしむるの効力はあるべし」とあり、以下、子規は「読者」という言葉を繰り返していきます。また、「約束した友の来ると来ぬとは其人の心には著しく影響する事なれど読者には何等の感を起さしめざるなり」とあったり、「読者にありては毫も同感の情を起す者にあらず」と述べたりしていますね。

子規はこれまで写生について繰り返し発言してきたわけなのですが、それらの中でこれほど読者の問題にふれるということはなかったのです。これほど読者の問題に言及しているものは見当たらないのです。子規はこの写生文において読者が作者と「同様に面白く感じ」ること、読者が「同感」することを非常に強く求めているわけです。このことから、写生文というのは、単に書き手が自分の見たものをありのままに書けば良いというものではなくてきます。つまり「取捨選択」ということが非常に重要になってくるのです。そのことは、「叙事文」の中では、「写生といひ写実といふは實際有のまゝに写すに相違なけれども固より多少の取捨選択を要す」というように述べられています。読者が「同感の情を起す」ように叙述の「中心」を定めなければならない、そして構成を工夫してゆく。その効果を通して読者は書き手と同じ面白さを共有すること、読者が作者と「同一の地位に立」つことが可能となる。子規はこのように考えるのです。その言わば「中心」——「中心」という言葉はこの「叙事文」の中でも繰り返し用いられている言葉なのですが——その中心を子規は、「山」と呼びます。子規は、文章には山がなければならないと考えるわけです。

子規はこの「山」を持った写生文の創作に向かって行きます。そしてこのような写生文創作のための文章会を催します。それが「山会」という名前と呼ばれる文章会です。子規

は山会をこの年の夏くらいから開催して行きます。

この「山」が重要だということも、言うまでもなく、読者を同感させるためである、ということになりますね。では、子規がこれほど読者の同感や共感を問題としているのはなぜなのでしょう。

私は、ここに子規の自らの病に対する意識が反映されているのだと考えます。これまで繰り返しふれてきたように、この年、子規の病は遠からぬ死を予感させるほどに、非常に重くなってくるわけです。例えば、自らの病を語る子規の「消息」という文章があります。子規が病んでいたのは結核です。結核が伝染性の病気である限り、感染の予防には十二分に配慮しなければならないわけです。この「消息」には次のようにあります。

然らば肺患者は社会と交際を絶ちて、孤島の流人の如く独りポツチにて暮らさざるべからざるか、庭の枯菊を見て檐の鳥籠を見て物干竿の古袋を見て一生を黙つて送らざるべからざるか、これは疑問に候。縦し世人は疑問とせざるも肺患者には大疑問に有之候。試に一步を譲つて諸君の来訪ありとするも共に物を喰ひながら快談するの一事無くば病人の楽は過半を殺がれ可申候。

（「消息」『ほととぎす』明治33年1月）

子規は「然らば如何可致か」と述べているのですが、これは非常に切実な問題であったはず。この同じ年、子規には静岡県興津へ転地療養する話を持ち上がりました。しかし、門人たちとの議論の結果、結局、この話は断念されることとなります。つまり明治33年における子規の病の悪化というのは、取りも直さず、自らの生のが、どんどんどんどん狭められ、閉ざされて行く、その過程に他ならなかったのです。このような中で「叙事文」が提唱される、そしてそこに読者との共感の場が託されていたのです。これは子規にとって、実は、他者との心情的な、あるいは精神的な連帯の希求に他ならなかったのではないのでしょうか。

子規が感じたこと、面白く思ったこと、美しいと感じたもの——それがこの写生文、叙事文を介して読者に伝達される。そして読者は、作者と同様に面白く感じ、同感の情を起す。このような形で作者と読者が結ばれて行く、連帯の場が形成されてゆく。このようなところに病床にある子規の非常に切実な願いがこめられていたと考えられます。

この叙事文、写生文の提唱というのは、一方では、年来の子規の写生の提唱に関連することではあったのですが、同時に病床にあった子規の切実な願いが託されていたのではなかったかと思います。そしてそれは、先に見た、病床からガラス戸の外に目を向ける、その子規の視線に託された想いと同様の、切実な思念であったと考えられるのです。

以上のように明治33年の子規は、非常に重い病の床につきながらも、むしろその中で非常に充実した創作活動を展開していきました。以後、子規はこの「病牀六尺」の世界に身を閉ざしながら、明治35年9月19日に没するまで旺盛な筆を振り続けることとなります。この明治33年という年は、晩年の子規の非常に優れた豊かな文学的世界を開く起点となっていると言って間違いのないだろうと思います。

2. 明治三十三年の土井晩翠

(1) 仙台の晩翠

明治33年は土井晩翠にとっても非常に大きな節目の年となりました。この年の1月に晩翠は母校である第二高等学校に戻って来ます。晩翠、29歳の時のことであります。ちなみに晩翠は、明治4年生れであり、子規、漱石よりも4歳の年下ということになります。子規と漱石は同じ慶応3年、1867年の生まれです。

晩翠は、明治32年の4月に処女詩集『天地有情』を刊行します。この詩集によって晩翠は、島崎藤村と並び称される詩人として、非常に高い評価を受けたわけです。また、晩翠は、東京帝国大学文科大学そして大学院で英文学の研鑽を積んだ英文学者でもあったわけ

ですね。そういう令名高い晩翠先生を迎えることになって当時の二高生たちは非常に喜んだようです。

第二高等学校の校友会雑誌である『尚志会雑誌』に掲載された「土井先生を迎ふ」（注4）という歓迎の辞があります。これは、「識見学殖」豊かな先生として、また何よりも「当代の詩宗」としての晩翠に対する期待感溢れた文章となっています。明治33年というのは晩翠がこのように仙台の地で教師として、英文学者として、そしてまた詩人として、新たな一步を踏み出す、そういう年となるのですね。

ここで、この年に関して、晩翠と子規、漱石との関わりについて少しふれておきましょう。明治33年というこの時期において、晩翠が子規や漱石と直接の関わりを持つということは全くありませんでした。しかし、実は、間接的な形で様々な関わり合いが認められるのですね。それはどういうことかと言いますと、まず、晩翠が第二高等学校に赴任して来た当時の校長先生である菊池謙二郎は、子規と漱石の大学予備門以来の友人であり、仙湖という号を持つ漢詩人でもあったわけなのです。この菊池謙二郎と子規、漱石との間に非常に親密な交流があったということは、彼等の書簡から確認できることです。それからこの明治33年の4月から校長が変わります。菊池謙二郎から中川元という人に変わるわけですが、この中川という人は、二高に赴任するまでは第五高等学校の校長でありました。つまり漱石と同僚であったわけですね。さらに、晩翠が赴任した時の英語科の同僚に、二高の名物先生として大変有名であった人ですが、栗野健次郎という人がいました。この人は、晩翠が旧制二高で学んでいた頃に既に先生でいたわけなのですけれども、この明治33年の時点で同僚となったのですね。この栗野という人は、第二高等学校に赴任する前には、第一高等中学校の教壇に立ち、漱石と子規を教えていたのです。それから、晩翠が仙台にやって来る前の年、明治32年12月、晩翠は結婚するわけですが、その時の媒酌人が芳賀矢

一という人でした。この人は、ご存知の方も多いと思いますが、明治33年9月に、漱石とともにドイツ船プロイセン号でヨーロッパ留学に旅立つことになる人であったわけですね。

こんなふうに漱石、子規との縁故、さまざまな関わりのある人々が晩翠の周囲にいたわけですね。そういう人々との関わりの中で、子規や漱石のことが話題になったことも、あるいはあったのではないかと想像されます。ただ、そのようなことを示す資料というのは全く残されておりませんので、ただ想像を巡らすばかりということになります。そんなふうに晩翠と子規、漱石には間接的ながらも関わりが認められます。

（２）第二詩集『暁鐘』への批判

さて明治33年の晩翠の問題に戻ることになります。さきほど言いましたように、この仙台の地で、学者として、教育者として、あるいはまた詩人として、晩翠の華々しい活躍がはじまるかに見えました。しかし、事態はそれとは大きく異なることになります。

もちろん仙台でも晩翠は詩を書いていくことになります。晩翠は、この明治33年から翌年はじめにかけての作品をまとめて、第二詩集『暁鐘』（注5）を刊行します。しかし、この詩集が上梓された時に詩壇の反応というのは全くなかったのです。ただその中で『暁鐘』にふれた唯一と言って良い評論があります。それは、小山鼎浦が書いた「現今の新体詩家 土井晩翠（上）」という評論です。これは、「土井晩翠（上）」とありますように、『帝国文学』明治35年9月、10月にわたって連載されたかなり長編の評論なのです。これはどういう評論なのかと言いますと、端的に言って晩翠否定の論なのです。

実は晩翠という人は東京帝大の学生の頃にこの『帝国文学』からデビューした詩人で、『暁鐘』におさめられる作品のいくつかもこの『帝国文学』に発表されています。その同じ『帝国文学』誌上で晩翠を否定するというのは、かなりやりにくいところもあったのだ

ろうと思われます。そのためだろうと思いますが、小山鼎浦の発言はたいへん婉曲的な、遠回しなものになっているのです。ただそういう語り口の中で、晩翠の『暁鐘』を小山は『天地有情』と対比しながらかなり強く批判していくのです。

ここでその批判の内容そのものの当否を問うということはいたしません。ただ、こうした詩壇の側の反応の意味を少し探してみたいと思います。小山は次のように言っているのです。

余は「詩人」、「登高」、「馬前の夢」「墓鐘」の諸篇を読んで、沈痛、真摯、雄渾、華麗なる彼の詩品の大に發展せんことを待望みき。されど境遇は彼を転じぬ、時代は彼を動しぬ。東都を去りて故山に家棲し、五城樓下、広瀬河畔、傍ら教鞭を執つて静かに読書を楽しみし彼は、人事の変異に屢々詩魂を驚して、光明を讀し理想を恋へる華麗の筆をば、感傷詠歎の題目に染め茲に哀痛の響を為しぬ。

（圈点 原文）

（小山鼎浦「現今の新体詩家 土井晩翠（上）」

『帝国文学』明治35年9月、10月）

「詩人」、「登高」、「馬前の夢」「墓鐘」の諸篇」とは、晩翠の『天地有情』におさめられた作品です。これはなかなか微妙な発言ではないでしょうか。晩翠は東京を去って故郷の仙台で教鞭を執りながら、静かな読書に勤しむ生活を送っている。そのような中から生まれた作品が、読者の期待、待望を裏切るものとなってしまっていると、小山は言いたいようです。言い換えますと、ここでは、仙台で作られた晩翠の作品は詩壇の要求を満たすものではもはやあり得ないといったことが、暗に語られているのではないかと思います。明治33年以後の晩翠の詩作品と詩壇との間に言わば大きなズレが生じてしまったこと、それが『暁鐘』が詩壇で黙殺されたことの意味なのではないかと考えられるのです。

（３）「登高賦」に見る晩翠の詩の性格

では、『暁鐘』の作品を見て行きましょう。

「登高賦」という作品をあげておきました。晩翠の詩は長いものが多く、読みあげるのはしにくいものですから、朗読は省略したいと思います。また、『晩翠詩集』所収の「登高賦」本文に晩翠自身が手入れの筆を加えたもの（注6）を掲げておきました。手書きで書き込みがなされているのは、晩翠自身によるものであります。ちょっと読みにくいかもしれませんが、一番最後のところにあるように、「1934.七・二十九」、つまり昭和9年7月29日に訂正とあります。これも合わせてご参照ください。

さて、『暁鐘』におさめられた「登高賦」という作品の末尾には「十一月一日国見峠にて起稿」とあります。これは言うまでもなく明治33年11月1日のことです。丁寧に読み解く暇がなく一読もしないでこの作品に言及するのはちょっと気がひけますが、この詩の性格を少し考えて行きたいと思います。

晩翠による「登高賦」の書入れを見てください。余白のところに晩翠は、「秋風の旅」と書きこんでいますね。この書き込みが、この作品を読んでいくときの1つのヒントとなります。つまり、この詩は、自在に吹き流れる風、秋の風の動きというものが、作品の世界を開いて行く、という形になっているのですね。

例えば、第2連から第3連にかけてのところ、「五城樓外西丘の夕、思ひは縹渺の空に入る。／江山そゞろに秋の思、その秋の精、秋の風、」とありますが、このように詩人の思いは秋の風と化すわけです。秋の風と化して自在に東西の地を吹き巡って行く。ヨーロッパから中央アジア、シベリアからアジア、そして日本へと駆け巡って行くわけです。その中で詩人の思いは、それぞれの地域の歴史や地理や風土というものを様々に呼び起こしていくのです。つまり、この詩は非常に高みから広大な時空間の拡がりを見渡す形になっているわけなんです。そしてそういう高みの位置にある詩人を支えているのは、古今東西にわたる文学や歴史、哲学などの知識や学識に他なりません。そういう知識や学識が、

広大な時空間の拡がりを見渡す詩人の視線と「思ひ」を方向付けているわけなんですね。このような詩のあり方は、実は『天地有情』にも認められるのですが、それが非常に徹底した形でこの「登高賦」に表れていると思います。

ここで晩翠を、さきほどふれた子規と比較してみましょう。正岡子規は、明治27年、「地図的観念と絵画的観念」という非常に面白い評論を発表しています。「地図的観念」と「絵画的観念」というのは何かと言うと、それは対象を見るその見方の問題、つまり対象をどのように見るかという問題です。絵画的観念というのは、通常の我々の物の見方、対象を捉える日常的な視覚の働きのことです。それに対し、地図的観念というのはどういうものかと言いますと、子規は次のように述べています。

地図的観念は之に反して恰も風船に乗り虚空高く颯りて下界を一望の裡に見下すが如き者なるを以て絵画的の如く遠近濃淡等は一切之れ無く茫々千萬里の間一山一水だも我眼を逃るゝ者あらざるなり。

（「地図的観念と絵画的観念」

『日本』明治27年8月6日、8日）

子規によれば、地図的観念とは、高みから下界を一望の下に見下ろす視線、俯瞰の眼差しのことを指しているわけです。それは、想像力による視線、想像の眼差しと言っても良いかもしれません。この子規の言葉を借りるならば、さっき見たような晩翠の詩とはまさに地図的観念に支えられていると言えるのです。一方、子規の場合はどうであったかと言うと、子規の写生というのは明らかに絵画的観念に基づいているわけです。まさにその眼で対象をあるがままに見ていくという絵画的観念にぴったりと重なって来るのが子規の写生という態度であるわけですね。

ここで子規の発言で注目しておきたいのは、地図的観念が孕む問題として次のような発言がなされていることです。

然るに地図的心象に至りては固より主観界の想像に止まるを以て其見る所茫然漠然恰も徳川時代の地図的道中図を見るの感あるべしと思はるゝなり。

(同前)

つまり、この地図的観念による場合には実景をそのまま捉えるのではなく、「主観界の想像」に基づくことになる。それ故、そこに呈示される光景というのは、「茫然漠然」としたものになってしまいがちだ、と子規は警告するのです。これは、ある意味で、晩翠の詩の性格を確かに言い当てる指摘になっているのではないかと思われるわけです。晩翠の場合、子規の言う「主観界の想像」にあたるのは、さきほど少し触れましたが、古今東西にわたる文学、歴史、哲学その他の書物に基づく知識であると言って良いと思います。その地図的観念、俯瞰的な視線がそのような知識に支えられることによって、晩翠の詩が呈示する世界は、実は、非常に抽象的な、あるいは類型的な様相を呈することになって、絵画的観念が捉える「心象の明瞭」を欠くこととなります。子規の言葉を参照した時に浮かび上がってくる、このような抽象的で、類型的なあり方が、晩翠の詩の一貫した性格となっていると言って良いかと思えます。

(3) 晩翠のヨーロッパ体験と詩作

これも良く知られていることですが、晩翠は、明治34年6月から37年の11月まで、3年半ほどにも及ぶ、ヨーロッパ外遊の旅に出ます。その間も詩の創作は続けられ、外遊中に作られた作品を収録した詩集として、第三詩集『東海遊子吟』が明治39年に出版されます。この3年半に及ぶヨーロッパ体験の中でも、晩翠の詩には本質的な変化は全くなかったと言って良いと思います。ここで『東海遊子吟』の作品を一篇だけ取り上げてみます。晩翠の詩を一篇も読み上げないのは申し訳ないので、この詩は比較的短いので読んでみます。

ブルヂエ湖畔月夜の曲

(南フランスの一名勝、こゝを背景としてラマル

テーンの名歌あり「湖」と題す)

歌やいづこ／たゞ漣にあらはれて／木陰にひそむ／夕風の声。

恋やいかに／大空高くすみのぼる／月たゞ照す／たへぬ思を。

さらば漕ぎ行け／一葉の小船／むかしの城のあとのこる／あなたの岸の片すみに／暗き声ある片すみに。

探りて得たる何の曲／夜目にもしるくアルペンの／雪の頂てりわたる、／月はしづかに山のはに／思の光をさめしを。

こぎ帰れ／こぎ返せ／人はむなし汀上のあけぼの／恋はふりぬ古城の残月。

歌やいづこ／さざなみ今は取りて／あけぼのゝの岸／風遂にさめず。

恋やいかに／ほのぼのしらむ月かげに／さむるは遠き／あけぼのゝ鐘。

(『東海遊子吟』大日本図書 明治39年6月)

タイトルの傍らの注記に記されているように、この詩は、晩翠が、南フランスのブルジェを訪れた時の作品です。晩翠の詩には珍しくたいへん平易な言葉で綴られています。一読しても何とも掴みにくい詩になっていますよね。そもそも湖の光景もどうもくっきり浮び上がって来ませんし、内容も分かりにくい。大体ここで「恋」という言葉が出てきますけれども、どうも唐突の感がありますね。

と、文句をつけてばかりではいけないのですが、この詩の掴みにくさは、実はこの詩が、注記でふれられているように、ラマルチーヌの「湖」という作品に基づいているためと考えられます。このフランス浪漫主義を代表する詩人、ラマルチーヌの詩については、入沢康夫さんによる翻訳があります。この「湖」

という詩はラマルチーヌのもっとも有名な作品の一つなのですが、この詩自体はあとでゆっくりとお読みいただくこととして、詳細な検討は省くこととしますが、次のような詩なんですよね。

1816年の秋に、ラマルチーヌはブルジェ湖畔を訪れます。そこで病身の既婚の若い女性と知り合い、激しい恋愛に陥ります。そして二人はこのブルジェ湖畔で互いの恋の想いを語り合うのです。そして丁度一年後の秋、詩人が一人でこの湖畔を再訪し、痛切な追懐の情を吐露する、という作品なのです。これについてはラマルチーヌ自身がこの詩の背景について語った文章が残されていて、色々面白い問題もあります。この詩と晩翠の作品の両者を読み較べて見ると、晩翠の「ブルジェ湖畔月夜の曲」というのが、ラマルチーヌの「湖」に対する応答として、あるいは反響として作られているということが理解されます。晩翠の詩に出てくる「恋」、あるいは「暗き声」など、作品に鏤められている様々な表現は、実はラマルチーヌの「湖」という詩の作品世界に描き出されている光景と呼応する形で語り出されています。晩翠の詩は、ラマルチーヌの詩に対する反響として生み出されているということがはっきりと見えてきます。つまり、ブルジェ湖畔を訪れた晩翠は、何よりもラマルチーヌの「湖」という詩を通して湖畔の光景を見つめています。あるいは、ラマルチーヌの詩を内面化した眼差しをもって眼前の光景を見つめていると言っても良いかと思います。それは例えば、さきほども述べました子規の写生短歌に認められた、その眼で見ることによる対象の発見の喜びとは全く無縁であると言わなければなりません。晩翠の場合、常に文学作品その他の書物によって、対象を見る視線があらかじめ方向付けられていた、というふうに考えられます。こういう点は、ヨーロッパの旅に取材した他の作品にも共通して認められることです。少なくとも、この『東海遊子吟』を見る限り、3年半のヨーロッパ遊学の時間は、それまでの詩人としての晩翠のあり方が突き崩

されたり、あるいは転倒されたりする、そういった体験ではあり得なかったようです。

(4) 詩壇の動向と晩翠の詩

明治39年に『東海遊子吟』が刊行された時に、やはり詩壇の反応というのは全くありませんでした。ただし、この詩集におさめられている作品の多くは、詩集に収録される前の段階で、『帝国文学』その他の雑誌に初出の形で発表されていました。その時点で、雑誌『明星』に新詩社同人の名前で「土井晩翠氏に与ふる書」(注7)という長編の評論が発表されています。この評論の内容を大まかに辿ってみたいと思います。

まず、この評論は、冒頭のあたりで日本の近代の詩の非常に急速な変化と進展の様を概括しています。その上で帰国間もない晩翠に対して——晩翠は明治37年12月に日本に帰っています——、「足下が詩人として如何なる位地にあるかを自覚」せよと告げるわけです。そして晩翠の詩が「十年一日の如く」であることを指摘します。「足下の聡明にして十年一日の如く其の旧容を改めざるは如何」と語るわけですね。これに続いて、後に『東海遊子吟』におさめられることになる作品について徹底した批判を加えて行くのです。その批判の趣旨というのは、内容に関しては、陳腐で、平板、常識的であることを、具体的な作品を取り上げて繰り返し指摘しています。また表現に関しても、粗雑、単調であり、散文的であると言って、非常に痛烈な批判を行っています。そして結論的に、この長い評論の最後の部分で、「而して思ふに、足下は終に詩人の資にあらざるなり」と言います。晩翠は詩人としての資質を欠いている、むしろ学者としてあるべきだということです。そしてもし「足下猶詩人として日本の文壇に立たむと欲せば、足下、詩界の進歩に後るる十年なるを知らざるべからず」と述べるわけです。これはかなり厳しい批判ですね。確かに厳しい批判なのですが、一面で晩翠の詩の本質を突いていると言わざるを得ないのではないかと思います。

これまで見てきたように、晩翠の詩は一貫して変わることがありませんでした。3年半にわたるヨーロッパ体験の最中にあっても、その基本的な性格は揺らぐことはありませんでした。そのような晩翠の詩は、目まぐるしい「回転」と「進歩」を重ねる日本の近代詩の流れから大きく外れて行く、反れて行くことになったわけです。

実際、明治における日本の近代詩の展開というのは、まさに変転目まぐるしいものであったのです。日本の近代詩が出発したのは、明治15年のことでありました。それまでの日本の伝統的な詩歌である短歌や俳句や漢詩、そういったものとは異なった新しい詩として、ヨーロッパの詩をお手本として生み出されたのが、「新体詩」と呼ばれるものです。新体詩とは、現在、我々が近代詩と呼んでいる、文学の新しい様式であったわけですね。この「新体詩」という名称の「体」というのは、「スタイル」とか「様式」と捉えれば分かりやすいと思います。在来の短歌や俳句、あるいは漢詩とは異なる新しいスタイルを持つ詩、ヨーロッパの様式に倣った新しい形式の詩として、近代詩は新たに生み出されることになりました。近代詩というのはこのように出発したものですから、言わば伝統詩歌のような、型とか見本といったものがないわけです。そういう次第でありましたから、日本の近代詩の歴史というのは非常に大きなそして急速な変転の歴史を強いられるということになる。非常に大きな変化の歴史を刻んで行くことになります。言わば変わることのなかった晩翠の詩は、こうした急速な動きと変化を示す詩壇の動向とズレて行くことになったわけです。後年になってから晩翠は自らの詩人としての歩みを振り返る中で次のように述べています。

翌年の正月早々に母校の二高教授となつて仙台に帰った。それからは、すっかり村夫子になつてしまつて、東京の文壇とは一切関係なしに、教職の傍ら著述をつづけて来た。私には、いはゆる詩人の生活はほとんどない。ずっと東京に残つてをつたならば、

いろいろの流派に混じつて、沢山の詩も書けたらうと思ふが、あの時に仙台に帰つて来なかつたなら、おそらくホーマーの翻訳などは到底出来なかつたらう。

（「文学生活」『晩翠放談』河北新報社 昭和23年8月）

仙台に戻って来て「東京の文壇とは一切関係」がなくなったということ、このことが晩翠の詩と詩壇との決定的なズレが生じる背景となったことは確かだろうと思います。明治33年は、晩翠が仙台の第二高等学校に赴任して来た年でありましたが、しかし、今見てきたような意味で、この年は晩翠の詩壇からの実質的な退場の時であったとも言わなければならないと思います。

（5）近親者の死と晩翠の詩

せっかくこのような機会に話をしながら、晩翠に対して否定的なことを繰り返して述べているように思いますので、ここでちょっと名誉回復と言いますか、晩翠復権に関わる話をしておきたいと思います。

晩翠がヨーロッパにあった3年半の間に、深く敬愛する友人とか近親者の死の報せを度々受けることになりました。それは高山樗牛、清沢満之、弟の土井新二その他の人々です。遠く異郷にあってそれらの死の報せを受けた時の衝撃、痛切な悲しみ、そして何もしえぬことの苦痛や苦渋、そういった切実な感情を表白した作品が幾つか生み出されています。例えば、「サレブ峰頭の吟」や高山樗牛を悼んだ「哀歌」などがその例になります。これらの作品には、異邦の地にあって近親者の死の報せを受け取った晩翠の慟哭が表白されています。その痛切で切実な悲しみや痛みが、さきほど見てきたような晩翠の詩の性格、枠組みを揺るがし、突き崩すような形で発露されています。死者から非常に遠く遠く隔てられていることが晩翠の悲痛の情を激しく掻き立て、またそのように隔てられている自己が身を置く「いま、ここ」が確かに見据えられています。そのような中で生み出された作

品の数はごく僅かなのですが、そのような作品を中核に据えながら『東海遊子吟』を再評価して行くことも、あるいは可能なのではないかと考えています。『東海遊子吟』についてはこれまで評価の軸をどのように見定めるかもはっきりしないまま来ているのですけれども、こういったところにポイントを据えながら、この詩集を見て行くということも可能ではないだろうかと思っています。

皆さんも「サレブ峰頭の吟」や「哀歌」といった作品を後でゆっくりご覧になっていたきたいと思います。

3. 明治三十三年の夏目漱石

(1) 漱石の英国留学体験

異郷においてかけがえのない友人の死の報せを受けるという衝撃は、夏目漱石もまた遭遇した事態でありました。言うまでもなく明治35年9月19日の正岡子規の死です。子規逝去の報せを伝える高浜虚子の手紙を漱石がロンドンで受け取ったのは、11月末のことでありました。以下、夏目漱石の明治33年について触れてみたいと思います。

「はじめに」でも述べましたように、漱石は、明治33年に文部省から2年間の「英語研究」を命ぜられ、同じ年の9月8日に留学の途につくわけですが、以後、明治36年1月に帰朝するまでの2年余りをイギリスで過ごすことになるわけです。では、時間も大分過ぎましたので、漱石におけるイギリス体験に絞って少しだけ考えてみたいと思います。

漱石がロンドンで生活を送る中で次第に抑え難くなってきたのは、端的に言って、あらゆるものに対する違和感と言って良いのではないのでしょうか。漱石は、英文学のみならず英国人、その社会や文化に対して強い不快感や距離感を覚えて行きます。一般に、文化や精神風土の全く異なる外国で生活を送る中で違和感や嫌悪感に強く捉えられ、そこから強力なナショナリズムへと反転するというのは、比較的良く認められる精神の反応であると思いますが、漱石の場合、「英国なるもの」に対する違和感は、母国・日本に対する愛着

だとか国粹的な心情に結び付くものでは決してなかったと言って良いかと思います。このことは当時の日記や書簡に様々に語り出されていることですが、ここでは「倫敦消息」(注8)の良く知られている一節を見てみることにします。これはもともと明治34年4月9日付でロンドンの漱石から子規、虚子へ送られた書簡です。その一節が「倫敦消息」と題されて『ほとゝぎす』に掲載されました。ここで漱石は、英国人に対して「色々癪に障る事」、「英吉利がいやになつ」たことを語るわけですね。そのようなことを語りながら、同時に、日本及び日本人に対して「たのもしくない情けない様な心持になる」、「色々な不平」を抱かずにはいられないことを漏らしています。ここには、英国と日本の双方に対して違和感や嫌悪感、あるいは不平の念を抱え込んでいる漱石がいます。

大変良く知られている『文学論』序(注9)の中で、漱石は自らの英国留学を振り返っていますが、その中で漱石は、「倫敦に住み暮らしたる二年は尤も不愉快の二年なり」と断言します。そしてすぐさま対句のように、「帰朝後の三年半も亦不愉快の三年有半なり」と続けるわけです。英国に対する違和、嫌悪の念を抱きながら、同時に英国から現在の日本を見ると、そこにも不快と不満の情を覚えざるにはいられない。どうやら漱石の英国体験は、イギリス、日本の双方に対する強い違和感や不快感を掻き立てていくものであったようです。

(2) 東洋と西洋の「趣味」の違い

そのような中で英文学の研究が続けられて行くということになりますが、漱石の英文学の研究がどのような方向に進むことになったのかということについて少し見てみましょう。そこでは英文学に対する違和感そのものが掘り下げられていく、ということになります。結論的な言い方になりますが、その違和感の背後に、日本あるいは東洋における文学と、英文学との間における越えることの出来ない差異が見出されていきます。その差異と

は「趣味」の違いに依るものだと漱石は考えます。この「趣味」の問題はなかなか難しいところがあるのですが、漱石は『文学評論』という著作の中でこの「趣味」の問題を繰り返し論じています。

漱石は「趣味」という言葉に“taste”という英語をあてています。このtasteという言葉は非常に多義的な言葉です。それは「好み」であり「品格」であり、また「分別」であり「流儀」でもあります。このような「趣味」というのは長い伝統の中で培われるものであり、文化や風俗、慣習の中に生きる人間の感受性に根差したものであって、それ故、容易には変えることのできないものであるわけです。従って、このような「趣味」の本質的な相違に基づく文学の差異というのは、言わば宿命的なものであり、それを乗り越えることは不可能である、ということになって行くのです。

漱石が英文学に対する自らの違和感を掘り下げていく中で到り着いたのは、このような地点であったと言って良いと思います。前に触れた正岡子規は、俳句、短歌の革新運動を行なう中で、美の普遍的な基準を見定めようとしていましたが、ここで漱石は、それとは丁度逆の方向を向いていたわけです。このような漱石にとって英文学の研究というものが次のような形を取るのとは当然のことであったと言って良いと思います。

かくして吾々日本人は如何なる程度まで西洋文学を理解することが出来、如何なる程度がその理解の範囲外であるかを、一個の夏目とか云ふ者を西洋文学に付いて普通の習得ある日本人の代表者と決めて、例を英国の文学中に取り、吟味して見たいと思ふのである。

（「英文学形式論」）

これは言ってみれば、日本人による英文学研究の限界、あるいは不可能性というものをあらかじめの前提とした問いの立て方になっています。このように漱石の中で英文学というのは徹底して相対化されたところに位置付

けられて行くわけですね。それは、これまで述べてきたことからすれば、まさに必然的な帰趨であったと言っていいと思います。

（3）イギリス体験と作家・漱石との関わり

さて大分話を省略していますが、留学生活を送っていた漱石の中に浮かび上がって来ていたのは、イギリスに対する、そして同時に日本に対する違和感であり不快感であったわけです。そこには、あらゆるものに距離を感じている、そして孤立を強いられている漱石の姿があります。先に取り上げた晩翠は、ヨーロッパ遊学の途次ロンドンに立寄り、漱石の出迎えを受けます。そしてしばらくの間、漱石の下宿に同宿することになったわけですが、おそらくその時の漱石と晩翠との精神的な落差というのは途轍もなく大きかったのではないかと思います。そして私は、漱石という人は、このような中で非常に重い問いを不可避免的に抱え込むことになったのではないかと考えています。すなわち、そのように全てのものから孤立せざるを得ない自己とは一体いかなる存在であるのか、そして、そのような自己が真に身を委ねることのできる、帰属できる場所は果して何処にあるのか、という根源的な問いであります。これはもちろん英文学の研究を通して解き明かすことのできるような問題ではありません。そして私は、恐らく漱石にとって文学の創作というのは、このような根源的な問いを問い続ける場所として選び取られることになった、と考えております。

子規によってはじめられた文章会の「山会」で、漱石が「吾輩は猫である」の原稿を披露したのは、明治37年末のことでした。明治33年にはじまるイギリス留学——その苦悩の時間が作家・漱石誕生の確かな機縁をなしていたと言えると思います。

おわりに

さて、もう本当に時間が尽きる頃となりました。というよりも、当初、私が予定した時間よりも随分とオーバーしてしまいました。

もう括りをつけようと思います。

これまで、正岡子規、土井晩翠、それから夏目漱石について考えてきました。明治33年という年がこの三者いずれにおいても大きな節目の時であったということ、そしてその同じ時間の中でそれぞれが固有の生を生きていたということ、その一端に触れて来ました。実際の具体的な交流とは別に、明治33年という同じ時間を生きた三者それぞれの生の固有の姿を浮かび上がらせてみようというのが、本日の私の試みでありました。今日の私の話が、皆さんがこれから改めて子規を、あるいは晩翠を、そして漱石を読み直して行くさやかなききっかけとなりえたら幸いです。

ご清聴ありがとうございました。

注1 「去年の正月と今年の正月と自分に格別違ふた事も無いが、少し違ふたのは、からだの余計に弱つたと思ふ事と、元日の蜜柑の喰ひやうが少かつた事と、年賀のはがきが意外に沢山来た事と、病室の南側をガラス障子にした事と、位である。ガラス障子にしたのは寒気

を防ぐための第一で、第二には居ながら外の景色を見るためであつた。果たしてあたゝかい。果して見える。見えるも、見えるも、庭の松の木も見える、杉垣も見える、物干竿も見える、物干に足袋のぶらさげてあるのも見える、其下の枯菊、水仙、小松菜の二葉に霜の置いて居るのも見える。」

(「新年雑記」『ほとゝぎす』明治33年1月)

注2 「拙宅前庭葉鶏頭は稍末方に相成候へども鶏頭の色は日に増し善くなり申候。赤の小菊一うね昨今咲き満ちて愛すべく相成候。」

(「消息」『ほとゝぎす』明治33年11月)

注3 『日本』明治33年1月29日、2月5日、3月12日

注4 『尚志会雑誌』明治33年3月

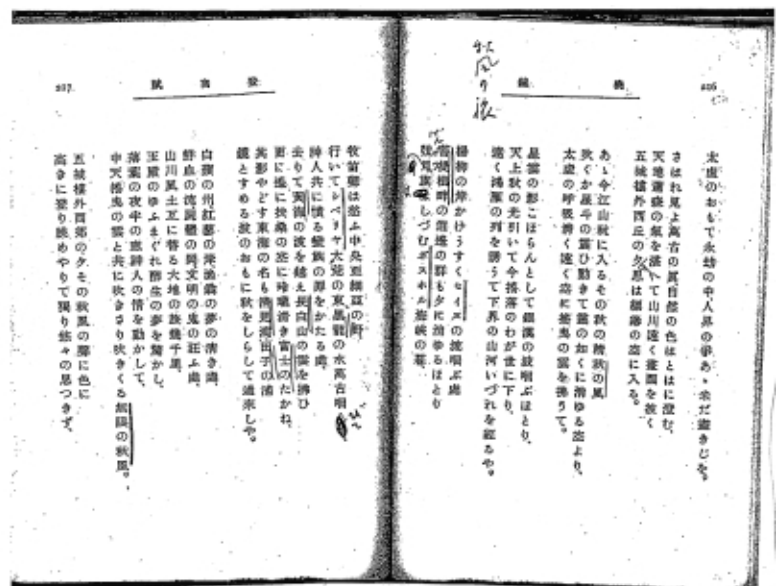
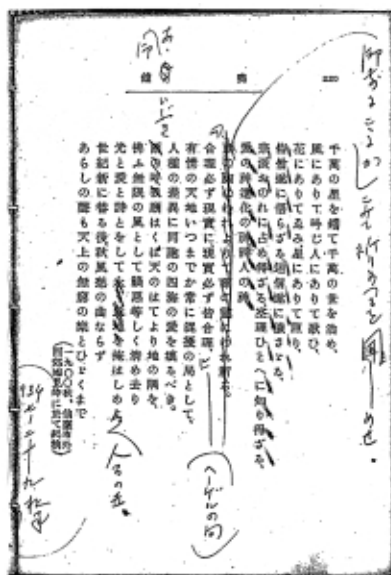
注5 有千閣・佐養書店 明治34年5月

注6 増補改版 博文館 昭和5年1月(晩翠手沢本)下写真

注7 『明星』明治38年3月

注8 『ほとゝぎす』明治34年5月

注9 大倉書店 明治40年5月



晩翠手沢本『晩翠詩集』(注6)

デジタイゼーション・イン・アメリカ：2003年度海外調査報告

総務課情報企画掛長 米 澤 誠

前奏

2003年度の海外調査は、小田忠雄名誉教授(前図書館長)が Mathematical Reviews 誌(以下「MR 誌」という)＊の編集委員会で米国ミシガン州アナーバーを訪問するのにあわせて、2003年9月末に急遽実施することとなった。

＊数学分野の論文レビュー誌であり、同誌およびそのウェブ版データベース MathSciNet は本学にも導入されている。

当初、編集委員会以外のスケジュールは未定であったため、他にも何か所か訪問することを検討した。その結果、今回は大学図書館以外の機関のデジタル化の活動を調査することとし、下記のようなスケジュールで2か所4機関を訪問することとした。

9月28日(日)	米国アナーバー着
9月29日(月)	①ミシガン大学図書館訪問 (MR 誌編集会議)
9月30日(火)	②MR 誌オフィス訪問 ③ProQuest 社訪問
10月1日(水)	移動、フィラデルフィア着
10月2日(木)	④Thomson-ISI 社訪問
10月3日(金)	米国発

※ 日付は米国時間

アナーバー(Ann Arbor)は洋書の出版地としてよく見かける地名だが、これはミシガン大学で多くの学術資料が出版されているためである。またここには、MR 誌のような学会誌の編集部のほか、旧 UMI 社を併合した ProQuest 社や JSTOR 社などの学術情報サービス関連企業も存在することで有名である。

日本からアナーバーに行くには、デトロイト・メトロポリタン空港が入り口となる。空港

到着後、タクシーで宿泊地であるアナーバーの Campus Inn へと向かった。

その日は、MR 誌編集局の Jane E. Kister 編集局長(Executive Editor)と同ホテルに宿泊する編集委員会委員らとともに夕食をとることとなった。全世界から集まった数学者同士のディナーは、政治・社会・文化など多岐にわたる話題がとびかい、時差ぼけで不眠の図書館員にはちょっと辛いものがあった。

第1幕 ミシガン大学 DLPS：プロジェクトから図書館サービスに

(1) ミシガン大学図書館

アナーバー2日目は、小田名誉教授が終日 MR 誌の編集委員会で、筆者1人でミシガン大学図書館を訪問した。別行動をとったのは、この日だけである。訪問調査の対象は、ミシガン大学の図書館ポータル機能と資料電子化プロジェクトで、事前に電子メールで担当者に連絡をとり、こちらの希望を伝えておいた。訪問したのは、中央図書館にあたる Harlan Hatcher Graduate Library であった。



Harlan Hatcher Graduate Library 正面玄関

ミシガン大学図書館は、北米における図書館規模ランキング第6位の大規模図書館である＊。創設は1839年で、現在19の図書館から構

成されている。主要な統計的数値について本学と比較すると、次のようになる。

	ミシガン大学	東北大学
蔵書冊数	7,348千冊	3,684千冊
受入冊数	179千冊	62千冊
雑誌種類数	68千種	19千種
職員数	459人	142人

* “Holdings of university research library in U.S. and Canada, 1999-2000”, The chronicle of higher education, June 22 (2001)

(2) 図書館ポータル

まずはじめに、ウェブサービス担当の Suzanne Gray 氏からポータル機能の説明を受けた。利用者一人一人が図書館ウェブページをカスタマイズできる MyLibrary 機能は、MyLibrary@NCState というオープンソースを利用して実現している。利用者は、ログイン後のページに表示するコンテンツリストやレイアウトを、自分の好みに変えることができるのである。このオープンソースは、現在ノートルダム大学図書館で管理・運用されており、どの機関でも利用できるようになっている。

次に、リアルタイム・レファレンスサービスである Ask a Question の説明を受けた。これは、オンライン・チャットにより即座に質問に対する回答をあたえるものである。利用者から受けたレファレンスについて、ミシガン大学の45名のレファレンス担当者全員が対応できる体制をとっている。システムは独自に開発したものではなく、OCLC の Question Point を利用したものである。

(3) デジタル図書館：DLPS

続いて、同図書館の電子化事業である DLPS(Digital Library Production Service) の説明を、DLPS 総責任者の John P. Wilkin 氏と情報検索システム担当の Cristina Powell 氏から受けた。DLPS は1996年から開始した電子化事業であり、資料の電子化工程のみならずそ

れを提供するシステムの整備に責任をもっている。提供するコレクションは、フルテキストデータベース（画像を含む）、書誌・レファレンスデータベース、画像データベースなど多様であり、その数約170種にもおよぶ膨大なサービスとなっている。これらのデータベースには、ミシガン大学以外で作成したものも数多く含まれている。



ミシガン大学の Wilkin 氏と Powell 氏

ミシガン大学が独自に作成したもので、最も大規模なデータベースは Making of America (MoA) である。これは19世紀の図書・雑誌のフルテキストおよび画像を収録するデータベースであり、図書約8,500件、雑誌記事約5万件を収録している。Andrew W. Mellon 財団と Sun Microsystems からの資金援助を受けて実施しているもので、これほど大規模の電子化を、ミシガン大学図書館が単独で実施している点に特色がある。

この他にも、Humanities Text Initiative (HTI) というプロジェクトでは、図書館員が研究者や出版社、情報処理技術者と連携して資料の電子化を進めるなど、意欲的な取り組みを行っている。

(4) DLPS の運営資金

Wilkin 氏の指導の下で、DLPS は当初5名のスタッフから25名に拡充した。その運営費の多くは補助金 Grant や産学連携 Partnership によるもので、Wilkin 氏によると DLPS の4ユ

ニットの運営費の内訳は、おおむね次のようであるという。

	大学	補助金	連携
Digital Conversion	15%	—	85%
Web Service	50%	50%	—
Information Retrieval	50%	25%	25%
Architecture	100%	—	—

Wilkin 氏は電子化の資金獲得に精力的に取り組んでいる。例えば、第 4 期の Making of America (1999–2001) として、Andrew W. Mellon 財団から42万ドルの補助金を獲得している。また、数学分野の単行書の電子化プロジェクトのために、全米科学財団 National Science Foundation から約31万ドルの資金援助を得ている。

ミシガン大学図書館では、デジタル図書館を一時的なプロジェクトの段階から、恒常的な図書館サービスとして定着させること目標にしているという。その目標設定と、積極的に外部資金を導入していく姿勢は、我々も大いに学ぶべきところだと考えた。

間奏（その1）アナーバーという街

アナーバー市は人口11万人足らずの街で、住民の半分程度はミシガン大学に何らかのかかわりをもっているという。緑が非常に多く平坦な小都市で、学園都市らしく、町なみはのんびりとして平和という印象であった。大学生に住ませたい街として、全米でももっとも人気のあるところだという。

なぜこんな場所にミシガン大学があるのかと疑問であったが、アナーバー・ディストリクト図書館 Ann Arbor District Library の市史展示を見て解決した。ミシガン大学は1817年に米国最初の州立大学としてデトロイトに設置されたもので、1837年になってからこの地にキャンパス移転したのである。その後、ミシガン大学の拡大とともに、大学の街として発展してきたのだという。人口103万人の大都市デトロイトが生んだ大学と思えば、この地にあるのも納得できるのであった。



ホテルから見たアナーバー市郊外



アナーバー・ディストリクト図書館

キャンパスはホテルから歩いて5分程度の場所にあり、滞在中何度かキャンパス近辺を散歩したものである。途中に Borders という全米チェーンの書店があり、何度か足をはこんだ。このアナーバーが発祥の地であるという。店内では、飲食をしながら立ち読みをする人が多かった（正確には座り読みだが）。読んだ本が無造作に床に置かれており、その散乱している本を店員が気にもとめないのに、ある意味で感動したのであった。

第2幕 MathSciNet：専門家による専門家のためのデータベース

（1）MR 誌

翌30日は、Kister 博士の案内・説明により、MR 誌の編集工程を見学した。MR 誌のオフィスは、キャンパスから車で5分と離れていない場所にあった。現在の建物は、元はミシガン・ユニオン・ビール会社のもので、1902年に建てられたという。



MR 誌オフィスビル前にて Kister 博士と筆者

MR 誌は、アメリカ数学会 American Mathematical Society (AMS) により1940年に創刊されたレビュー誌である。1970年代半ばからミシガン大学内で電算化が始まり、1980年以降に編集工程全体が電算化された。最初の電子的製品である MathSci Disc ができたのが1989年で、オンラインサービス MathSciNet は1996年に始まった。職員数は約70名である。

現在 MathSciNet は、総レコード数約160万件、年間約5万件的論文レビューを収録する大規模2次情報データベースとなっている。収録対象誌は約1,800タイトルで、本学の「東北数学雑誌」もちろん収録対象となっている。

(2) 編集工程

MR 誌の編集工程は、以下のようになっている。

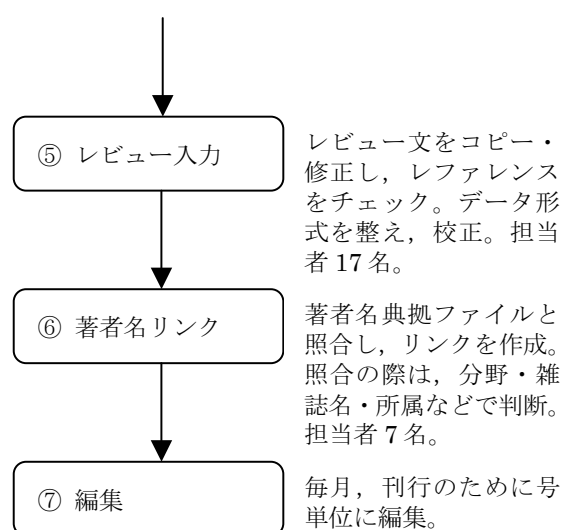
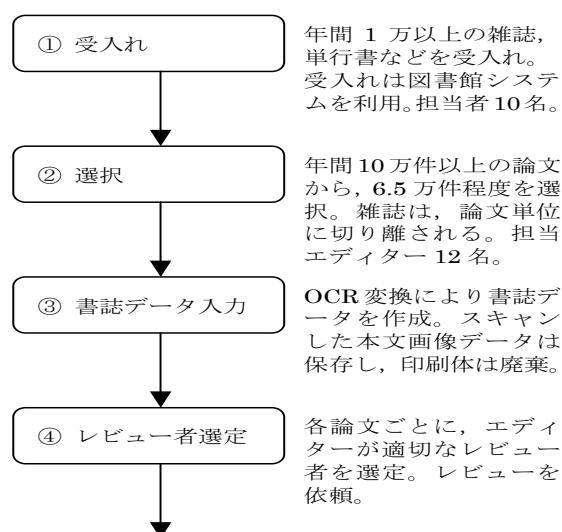


図1 MR 誌の編集工程

レビュー誌という性格上、論文のレビューに関わる②、④、⑤の処理が大きな役割を果たしている。

(3) MathSciNet の特色

MathSciNet というデータベースの特色は、次のようなところにある。

- ・専門家によるレビュー誌である。
- ・数学分野の分類として標準となっている MSC(Mathematics Subject Classification) 番号を付与している。
- ・MRef システムにより著者名典拠コントロールを行っている。

今回の訪問では、MR 誌オフィスの Norman Richert 氏および Drury R. Burton 氏から、MathSciNet の著者名典拠コントロールについて詳細な説明を受けた。MR 誌は、通常の編集以外の新たな製品開発にも力を入れており、この二人はその開発の中心となっている。

MR 誌では、非常に厳密な著者名典拠コントロールを行っている。著者名典拠ファイルには、省略形など同一著者のさまざまな表記は全て収録し、さらに所属機関の履歴も管理しているという。また、全体の2割程度は著者を同定できないが、電子メールで全て確認するという徹底ぶりであった。

最新の開発製品として、MRef という引用文献情報作成ツールの説明を受けた。これは、研究者が自分の論文でレファレンス（引用文献情報）を作成する際に、手元にある情報で MR 誌形式の正確な文献情報を検索できるツールである。MR 誌形式のほかに、HTML 形式や TeX 形式などのフォーマットでも文献情報を取得することができる。冊子体の数学論文をスキャナーで読み込み、OCR 化された引用文献欄のまちまちデータ・フィールド配列や不完全情報から、書誌情報を正確に取得して相互リンクに利用でき、遡及デジタル化の際に不可欠な機能である。

全体を通じて感じたのは、MR 誌は専門分野のデータベースとして、研究者を満足させるだけの高品質と高機能を追求しているということであった。そのために、小田名誉教授を編集委員会委員に迎えることでも知られるように、**常に利用する研究者側の視点を取り入れる編集企画を行っている姿勢が伺われる。文献を重要視する数学分野ならではのかもしれないが、利用者サイドに立ったサービスを行う点には、見習うべきものがある。**



MR 誌の Burton 氏と Richert 氏と筆者

間奏（その2）米国第3位の日本語コレクション：ミシガン大学アジア図書館

ミシガン大学図書館を訪問した際に、同じ建物内の4階にあるアジア図書館を訪問した。この訪問は、ミシガン大学訪問の日程が決まった時点で、アジア図書館の日本人司書である仁木賢司氏に直接メールでアポイントメントをとって実現したものである。以下、仁木氏にお教え

いただいた話をもとにミシガン大学アジア図書館の特徴について紹介したい。

このアジア図書館には、約10万冊の日本語資料が収蔵されている。これは、コロンビア大学、カリフォルニア大学バークレー校に次ぐ、全米第3位のものである。英国の図書館で所蔵する日本語資料の総数が約10万冊強であることと比較すると、1大学としては非常に充実した蔵書であるといえる。

ミシガン大学には、第二次大戦前から日本語関係の学科があり、日本研究が盛んであった。戦時中には、対日諜報活動の教育も行われていたという。また、小津安二郎などの日本映画についても関心が高く、その関係の資料も充実している。4階の上にある屋根裏の書庫には日中韓の新聞のバックナンバーが多数収納されていた。

仁木氏は、ミシガン大学に赴任する前は、コロンビア大学に在職していたとのことである。東海岸から転勤して、淡水系しかないという魚類の食材の少なさに嘆いたとのことであった。その代わり、米国中西部の牛肉の美味さと安さは賞賛していた。

第3幕 ProQuest：保存メディアとしてのアナログとデジタル

（1）ProQuest 社

ProQuest Information and Learning 社は、学術教育関係のデータベースや雑誌論文・新聞記事を提供するサービスを行っている。ProQuest の名のもとに、Chadwyck-Healey と UMI ブランドの各種製品を提供している。本学では、Periodicals Citation Index(PCI) という人文社会科学系データベースを導入している。

アナーバー出版施設は、学位論文や新聞の本文をマイクロ化する旧 UMI 社を引き継いだものであり、Early English Books Online や19世紀にさかのぼる新聞の全文記事を提供する事業などを手がけている。

まず我々は、アナーバー市中心から南約5kmの Eisenhower Place にあるオフィスを訪問し、副社長の Rod Gauvin 氏から同社の事業

に関する概要説明を受けた。アナーバー市には、約1,200名の職員が勤務しているという。その後、市の西郊外約10kmのZeeb Roadに位置する出版施設に移動し、施設見学を行った。

(2) マイクロ化

まず始めに説明を受けたのは、新聞・雑誌などをマイクロ撮影する設備であった。設備自体は目新しいものではないのだが、全ての部署が3シフト制をとって、設備自体を24時間フル稼働させて費用対効果をあげるという徹底的なマネージメントであった。

マイクロ撮影したフィルムは、次に現像されてマスター（第1世代）となる。このマスターから第2世代のマイクロ、第3世代のマイクロが作成される。これらはすべて、専用のマイクロ保存書庫に収納され、その総数は5.5億ページにのぼるという。保存書庫の書架が何十メートルも並ぶ光景は、壮観であった。

第2世代、第3世代のマイクロから、販売用のマイクロフィルムや冊子体の製品が複製される。電子出版部では、単体商品の販売の他に、教育機関向けのコースパックを用意して、注文に応じているという。



Zeeb Road の ProQuest 社

(3) デジタル化

デジタル化は、アナログ情報であるマイクロ媒体からデジタル化する工程と、冊子原文をOCR スキャニングしてデジタル化する工程の2種類に大別される。新聞や古典籍は、資料をいためずかつ効率的に撮影できる前者の方式で、デジタル化を行っている。雑誌論文や学位

論文については、フィーダー付きのスキャナーを使った後者の方式で、効率的にデジタル化を行っている。マイクロ化の工程にもデジタル化の工程にも、厳密な製品検査が組込まれている。

Early English Books に代表される古典籍や、19世紀にさかのぼる新聞などの歴史的に価値のある資料は、デジタル媒体だけではなくマイクロというアナログ媒体でも保存していることに注目するべきであろう。**頻繁にデータ形式が変わるデジタル情報に対して、マイクロというアナログ情報は、歴史的に見ても実績がある。遠い未来においても、情報の保存形式としては信頼性が高いと判断しているものと考えている。**

平成15年度からの本学和算資料の電子化手法についても、同様の判断をしてマイクロ化とデジタル化を組み合わせ実施している。

間奏（その3）デトロイト・ワールドゲートウェイ

アナーバーでの用務を終えて、月が変わった10月1日にフィラデルフィアに向かった。出発する空港は、米国に到着した時と同じデトロイト・メトロポリタン空港であった。到着時は空港内を歩くこともなかったが、今回は出発までの時間もあったので、ゆっくり見て回ることができた。

この空港は別名ワールドゲートウェイとも呼ばれ、我々が搭乗したノースウェスト航空の最大の拠点となっている。国際線の大半は一旦この空港に到着し、利用客はここから国内線に乗り継いで米国内に向かうという、一種のハブ的な役割を果たしている。

デトロイト・ワールドゲートウェイは、2002年に建てられ、その機能的で斬新なデザインにより、建築・工学・運輸・デザインなどの分野で数多くの賞を受賞しているという。

建物全体は横一直線に長く、400m位の距離がある。出発ゲートに入る位置はこの直線の間点にあり、さまざまに変化する噴水がある広場となっている。利用者は、そこから左右に並ぶ搭乗口に向かうことになるのだが、延々とこの直線を歩くことはない。通路の上方にトラムという電車が2台、常に左右に行き来している

からである。トラムが運行している空港は、ここが世界初であるという。



デトロイト・ワールドゲートウェイ

確かに私の少ない経験からしても、構造がシンプルで分りやすく、上にトラムが走っていても空間が広々としており、非常に快適な空港だと思った。ユーザ志向の設計で機能的で美しい景観をもつ建物であり、一見の価値がある。

第4幕 Thomson-ISI 社：学術コミュニケーションを数値化する試み

(1) Thomson-ISI 社の製作工場

Thomson-ISI 社は、Web of Science の提供元として知る人も多いであろう。米国本社は、ペンシルベニア州フィラデルフィア市のペンシルベニア大学にほど近い場所にあった。今回は、午前中にデラウェア川を渡った市郊外の Cherry Hill（隣のニュージャージー州）にあるデータベース製作工場を見学し、午後に本社でミーティングを行うこととした。

本社の Nicola Hill 氏とアイルランド工場から出張で来ていた Jodi L. Bukowski 氏が同行して、本社から15km 離れた工場まで移動した。始めに、Lynn M. Sonk 氏から ISI 社のデータベース製作工程である International Data Production Operations (IDPO) の概要説明を受け、その後、各工程をまわりながら現場で説明を受けた。この工場の職員数は、72名であるという。

(2) 製作工程

ISI 社の製作工程 IDPO は、以下のようになっている。

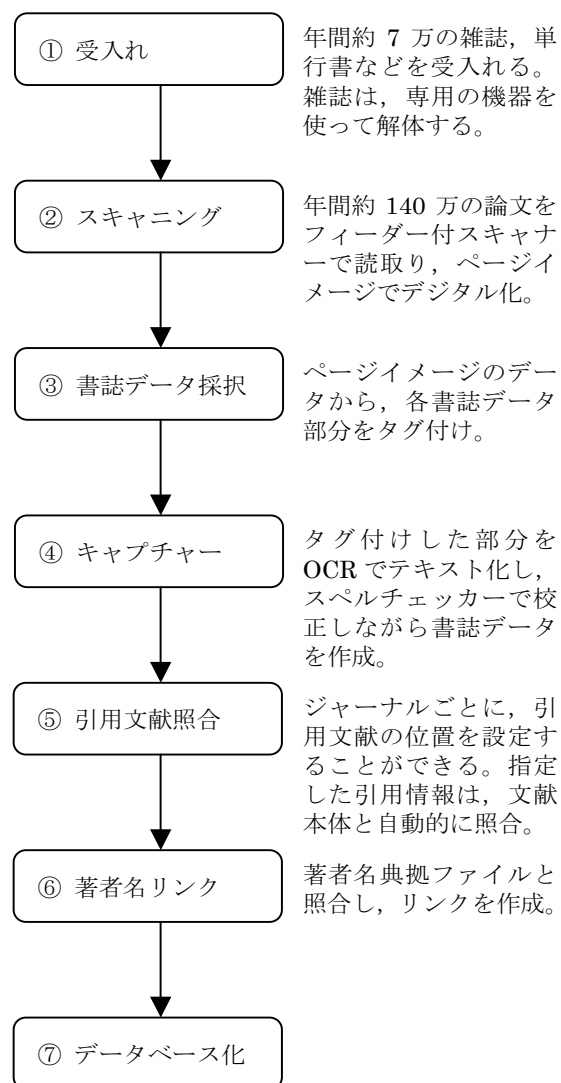


図2 ISI 社の製作工程

スキャニングから書誌データの採択（タグ付け）、OCR キャプチャーによるデータ入力という一連の工程は、非常に効率的である。工程全体の所要日数は5.8日であり、データベースの更新は毎日行われている。同一の職員数・同一の所要日数で、毎年増加するデータ入力件数を処理し続けるために、IDPO では、常にデータ品質、製作方法、効率性の向上を図っているという。

Cherry Hill 工場のほかに、ISI はアイルランドに製作工場をもっている。製作工程を二重

化することで、災害時等に製作機能が完全に停止することがないようにしているとのことである。

(3) WoS の将来展開

昼食後の本社でのミーティングでは、製作部門副社長の Jim Pringle 氏と同ディレクターの Reynold Guida 氏から、Web of Knowledge の将来構想や、外部データベースを統合検索することのできる新機能 Webfeat について説明を受けた。Web of Science については、2004年4月から論文著者名の Full Name 化を始める計画や、ブラジルで進めている Author Project 計画についての説明もあった。我々からは、日本の各大学で進めている研究者データベースの状況について紹介した。

次いで、2002年10月に本学を来訪した David A. Pendlebury 氏から Essential Science Indicators(ESI) の新バージョンについての説明を受け、その後、意見交換を行った。特に小田名誉教授との間では、数学分野内での引用回数 の取扱い上の問題点や著者名典拠の取扱いについて、内容の濃い議論が交わされた。



ISI 社でのミーティング

Web of Science ほどの大規模データベースになると、改善を図っていくのはなかなか大変なことである。それにも関わらず、ユーザの意見を聞いて取り入れようとする姿勢を目の当たりにすることができた。Citation Index の創設者で、現在 ISI 名誉会長である Eugene Garfield

氏の意思を継いで、学術コミュニケーションを数値化する試みを続けるスタッフと話し合えたのは、貴重な経験であった。



本社内 Garfield 氏デザインの壁面前にて小田名誉教授と筆者

後奏 フィラデルフィアからの帰国

米国第5の大都市フィラデルフィアは、人口約160万人である。1682年に英国のクエーカー教徒ウィリアム・ペンにより創設された歴史ある街で、独立宣言採択された街でもある。市内には名所旧跡が数多くあり、到着した日に時間を見つけて、街中を歩いてみた。

最も印象に残ったのは、見事な時計台のある市庁舎 City Hall と E. A. Poe 記念館であった。また、フィラデルフィア交響楽団の本拠地である Kimmel Center も美しい建物であった。また別の機会に、ゆっくり時間をかけて見てまわりたい街であった。

最終日は、フィラデルフィアからノースウェスト航空の拠点の一つであるミネアポリス国際空港経由で成田に帰国し、調査の全日程を終了した。

以上、それぞれ特徴的なデジタル化の活動を行う4つの機関について、筆者なりの収穫を報告させていただいた。

最後になるが、海外調査の機会をあたえてくださった関係者の方々と、出張中終始ご指導いただいた小田名誉教授に、この場をかりて感謝申し上げ、この報告の終わりとしたい。

(よねざわ・まこと)

附 属 図 書 館 の 概 況

この概況は毎年実施される大学図書館実態調査のうち主な項目をとりまとめたものである。表1は平成12年度～平成14年度の概況、表2は平成14年度部局別のものである。

表 1

区 分		平成12年度	平成13年度	平成14年度
蔵 書	和	1,813,300 冊	1,850,223 冊	1,865,844 冊
	洋	1,774,325	1,804,020	1,818,812
	計	3,587,625	3,654,243	3,684,656
所 蔵 雑 誌 数	和	29,276 種	31,517 種	32,891 種
	洋	35,968	37,797	36,963
	計	65,244	69,314	69,854
年 間 受 入 数	和	31,505 冊	36,923 冊	35,948 冊
	洋	32,467	29,695	26,439
	計	63,972	66,618	62,387
年 間 雑 誌 受 入 数	和	12,077 種	11,764 種	11,713 種
	洋	8,446	8,010	7,563
	計	20,523	19,774	19,276
奉仕対象者数	学 生	18,329 人	18,329 人	17,315 人
	教 官	2,587	2,571	2,645
1人当り奉仕対象	蔵書数（冊）	171.5	174.8	184.6
	年間受入冊数(冊)	3.1	3.2	3.1
	図書館資料費(千円)	42.7	42.0	44.3
図 書 館 職 員 数	総 数	137 人	135 人	134 人
	専 任	69	68	65
	臨 時	68	67	69
図書館職員1人当り奉仕対象者数		152.6	154.8	149.0
図 書 館 資 料 費（千円）		892,721	877,030	884,574
大 学 総 経 費（千円）		88,417,302	87,760,056	90,119,061

表 2

部 局	職員数() は定員外職員 の人数	蔵 書 (平成15年3月31日現在)				平 成 14 年 度 受 入 冊 数				平 成 14 年 度 経 費				施設 (平成15年3月31日現在)									
		図 書 (冊 数)	雑 誌 (種類数)	計	和	洋	計 (分冊入)	和 (分冊入)	洋 (分冊入)	計 (分冊入)	図 書 (種類数)	図 書 雑 誌 (千円)	その他 (千円)	運営費 (職員給与除) (千円)	座席数 (席)	延面積 (㎡)	閲覧室 スペース (㎡)	収容可能 書 庫 スペース (冊)					
本 館	51 (25)	707,384	363,059	1,070,443	13,010	7,763	20,773	11,975 (8,025)	3,601 (1,808)	15,576 (9,833)	3,003 (339)	786 (266)	3,789 (605)	49,573	16,661	19,278	85,512	223,753	1,131	18,215	5,706	4,729	1,757,167
	2 (2)	270,319	150,358	420,677	1,272	1,081	2,353	7,619 (3,807)	2,988 (1,582)	10,607 (5,389)	694 (273)	596 (380)	1,290 (853)	45,898	20,488	3,590	69,976	4,683	1	68	2	10	4,972
	3 (3)	58,350	40,195	98,545	747	437	1,184	1,424 (1,186)	631 (408)	2,055 (1,594)	409 (97)	210 (305)	619 (305)	10,584	10,182	0	20,766	10,386	17	200	59	107	27,389
	3 (0)	109,810	141,891	251,701	1,061	756	1,817	1,936 (1,152)	2,953 (1,960)	4,889 (3,112)	738 (223)	574 (311)	1,312 (734)	41,742	14,229	768	56,739	4,836	24	835	42	580	81,028
	5 (3)	191,080	179,015	370,095	2,209	1,340	3,549	3,260 (1,214)	1,715 (607)	4,975 (1,821)	1,337 (606)	624 (540)	1,961 (1,146)	25,264	35,608	323	61,195	14,177	18	286	46	162	27,472
本 館 関 係	1 (0)	18,028	12,904	30,932	447	316	763	2 (2)	17 (13)	19 (15)	78 (1)	25 (9)	103 (10)	426	1,859	0	2,285	177	6	241	28	197	22,500
	3 (2)	19,469	55,421	74,890	410	1,134	1,544	128 (5)	360 (50)	488 (55)	133 (64)	115 (89)	248 (153)	655	19,724	0	20,379	3,695	11	917	86	482	127,667
	2 (2)	12,885	20,513	33,398	79	410	489	48 (15)	174 (14)	222 (25)	33 (27)	58 (34)	91 (81)	177	8,765	17	8,959	3,691	27	207	70	127	39,111
	2 (0)	9,540	25,832	35,372	359	546	905	196 (103)	613 (119)	809 (222)	168 (119)	172 (164)	340 (283)	2,951	16,929	652	20,532	3,601	31	579	86	381	56,000
	2 (2)	869	4,733	5,602	8	92	100	3 (0)	104 (0)	107 (0)	0 (0)	15 (15)	15 (15)	0	3,221	0	3,221	4,941	4	98	12	35	5,778
医 学 分 館	2 (2)	11,146	4,180	15,326	29	13	42	3,387 (782)	1,109 (462)	4,496 (1,244)	45 (41)	42 (82)	87 (87)	10,443	2,500	0	12,943	6,069	0	120	0	110	22,917
	76 (41)	1,408,880	998,101	2,406,981	19,631	13,888	33,519	29,978 (16,291)	14,265 (7,023)	44,243 (23,314)	6,638 (1,790)	3,217 (2,477)	9,855 (4,267)	187,713	150,166	24,628	362,507	280,009	1,270	21,766	6,137	6,920	2,172,001
	19 (11)	156,356	250,978	407,334	4,306	9,518	13,824	2,285 (1,421)	3,921 (3,286)	6,206 (4,707)	1,315 (506)	1,460 (1,323)	2,775 (1,829)	13,654	125,556	292	139,502	97,552	327	4,025	464	2,190	418,333
	10 (6)	73,188	287,462	360,650	1,780	6,672	8,452	948 (633)	3,921 (389)	4,869 (1,022)	837 (177)	1,355 (714)	2,192 (891)	11,125	136,830	304	148,259	39,444	248	3,356	1,140	1,310	309,389
	17 (6)	140,857	164,111	304,968	3,163	3,896	7,059	1,931 (959)	2,691 (949)	4,622 (1,908)	1,604 (431)	945 (835)	2,549 (1,266)	31,812	110,903	1,976	144,691	58,587	384	5,355	2,460	605	294,639
農 学 分 館	6 (2)	69,314	56,761	126,075	3,649	2,055	5,704	669 (262)	966 (80)	1,635 (342)	1,172 (148)	427 (303)	1,599 (451)	3,852	42,253	300	46,405	14,161	72	1,279	317	418	123,667
	52 (25)	439,715	759,312	1,199,027	12,898	22,141	35,039	5,833 (3,275)	11,499 (4,704)	17,332 (7,979)	4,928 (1,262)	4,187 (3,175)	9,115 (4,437)	60,443	415,542	2,872	478,857	209,744	1,031	14,015	4,381	4,523	1,146,028
	6 (3)	17,249	61,399	78,648	362	934	1,296	137 (21)	675 (50)	812 (71)	147 (58)	159 (110)	306 (168)	5,947	35,395	1,868	43,210	10,522	30	534	154	253	65,833
総 計	134 (69)	1,865,844	1,818,812	3,684,656	32,891	36,963	69,854	35,948 (19,587)	26,439 (11,777)	62,387 (31,364)	11,713 (3,110)	7,563 (5,762)	19,276 (8,872)	254,103	601,103	29,368	884,574	500,275	2,331	36,315	10,672	11,696	3,383,862

注)職員数は平成15年5月1日現在

人 事 異 動

平成16年 3月31日現在

発令年月日	新 官 職	氏 名	旧 官 職	備 考
16. 3.31		坂 上 光 明	事務部長	定年退職
"		菅 原 邦 男	総務課課長補佐	"
"		小 松 武 彦	情報管理課図書情報掛長	"
"		前 田 裕 子	情報サービス課閲覧第二掛長	"
"		穴 戸 友 三	医学分館総務掛主任	"
"		川 村 隆 男	工学分館図書館専門員	"
"		名 倉 千 春	事務補佐員（総務課庶務掛）	任期満了
"		京 極 貴 子	事務補佐員（総務課会計掛）	"

編 集 後 記

今号では、学術雑誌の編集長もされていた佐藤医学分館長が、冊子体による文献検索から初期のデータベースの時代を経て、インターネットを利用した情報環境へ至る過程について書かれていますが、当時からの状況を知る者として感じるのは、欧米に比べて大学の学術情報整備や学術コミュニケーションに対する係わり方の度合いの差が昔も今もあまり変わらないことです。

新たな国立大学法人像の一つが、個性豊かな大学づくりと国際競争力ある教育研究の展開であるようですが、そのためには大学としての情報発信や学術情報基盤の整備をもっと積極的に進めていく必要性を感じます。

最後に、今年度も多くの方々に寄稿を依頼し快くお受けいただきました、改めて御礼申しあげます。(M)

東北大学附属図書館報「木這子」 第28巻第4号（通巻105号）発行日 平成16年 3月31日

発行人 坂上 光明 広報委員長 諏訪田 義美

発行所 東北大学附属図書館 〒980-8576 仙台市青葉区川内 電話 022-217-5911, FAX 022-217-5909
URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>